

五斗遺跡・菅田遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業 姫田川右岸地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

2021

新発田市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県新発田市下三光字五斗 1161 番地 1 ほかに所在する五斗（ごと）遺跡と新発田市下中江字茂作田 115 番地ほかに所在する菅田（すがた）遺跡（1 区）の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、「経営体育成基盤整備事業 姫田川右岸地区」に伴う本発掘調査である。新潟県新発田地域振興局から委託を受けて、新発田市教育委員会が調査主体となって実施した。五斗遺跡の現地調査は、令和元年（2019）6月 25 日から 8 月 9 日、8 月 30 日から 9 月 26 日。菅田遺跡（1 区）の現地調査は、令和元年（2019）9 月 27 日から 10 月 23 日に行つた。整理作業は、両遺跡とも令和元年 11 月 1 日から令和 2 年 2 月 28 日に基礎整理作業と本格整理作業、令和 2 年 6 月 1 日から 8 月 31 日に報告書作成を行つた。なお、本業務は、株式会社吉田建設に委託し、基礎整理作業と本格整理作業は株式会社吉田建設整理室、報告書作成は株式会社吉田建設三条営業所で行つた。
- 3 本発掘調査に要した経費は、総額の 92.5% を事業者である新潟県新発田地域振興局が負担し、残りの 7.5% を文化財保護担当部局である新発田市が負担した。なお、文化財保護担当部局負担分については、その半額を国庫補助、残りを県費補助と市費で負担している。
- 4 遺物と図面・写真ネガ・日誌などの記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は、五斗遺跡は「五斗」、菅田遺跡（1 区）は「菅田」と略記し、必要に応じて調査区名・グリッド・遺構・層位・遺物番号・年月日を記し、分類・収納している。
- 5 本報告書の作成は、本田祐二（新発田市教育委員会）の監督のもと、伊藤正志（株式会社吉田建設）を中心に、整理作業員が遺物の図化、拓本、トレース、挿図・図版の版下作成を行つた。
- 6 本書掲載の写真は、遺構を伊藤・長沼古嗣（株式会社吉田建設）が撮影し、遺物は伊藤が撮影した。
- 7 第 V 章の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、業務報告と結果を掲載した。
- 8 本書の編集は本田の指導・監督のもと伊藤が行い、第 II 章 1 を本田が、第 V 章を除くほかを伊藤が執筆した。
- 9 遺物番号は、挿図・写真図版とも同一の通し番号を付した。
- 10 図書館等（著作権法第 31 条第 1 項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に共するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 11 発掘調査から本書の作成まで、下記の諸氏・機関から御助言・御支援を賜わった。記して感謝の意を表す次第である。（五十音順、敬称略）

株式会社水倉組 川東土地改良区 新発田建設株式会社 新潟県教育庁文化行政課

新潟県新発田地域振興局

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置と立地	1
2 歴史的環境と周辺の遺跡	2
第Ⅱ章 調査の概要	
1 調査に至る経緯と調査体制	5
2 調査経過	6
3 遺構と遺物の記載方法	10
第Ⅲ章 五斗遺跡の遺構と遺物	
1 グリッド設定と基本土層	12
2 遺構・遺物の概要	14
3 遺構と遺物各説	14
第Ⅳ章 菅田遺跡（1区）の遺構と遺物	
1 グリッド設定と基本土層	37
2 遺構・遺物の概要	37
3 遺構と遺物各説	37
第Ⅴ章 自然科学分析	
1 試 料	43
2 分析方法	
(1) 樹種同定	43
(2) 放射性炭素年代測定	43
3 結 果	
(1) 樹種同定	45
(2) 放射性炭素年代測定	45
4 考 察	45
第VI章 ま と め	
1 五斗遺跡出土土器について	48
2 菅田遺跡（1区）について	48
引用・参考文献	50
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第17図 4号溝、1号性格不明遺構	24
第2図 遺跡の立地	2	第18図 1号性格不明遺構出土遺物	25
第3図 周辺の主な古代・中世遺跡	3	第19図 桁列、遺物集中	26
第4図 五斗遺跡調査範囲と確認トレンチ	6	第20図 桁、遺物集中出土遺物（1）	27
第5図 菅田遺跡（1区）調査範囲と 確認トレンチ	7	第21図 遺物集中出土遺物（2）	28
第6図 器種分類	11	第22図 遺構外出土遺物（1）	29
第7図 五斗遺跡グリッド図、基本土層	13	第23図 遺構外出土遺物（2）	30
第8図 五斗遺跡遺構配置図	15	第24図 菅田遺跡（1区）グリッド図、 基本土層（1）	38
第9図 1・2号土坑	16	第25図 菅田遺跡（1区）基本土層（2）	39
第10図 4～8・10・11号土坑	17	第26図 菅田遺跡（1区）遺構配置図	40
第11図 1・8・11号土坑出土遺物	18	第27図 1・2号土坑、湿地、 遺構外出土遺物	41
第12図 1～3号溝	19	第28図 历年較正結果	46
第13図 4・21・26号溝、1号性格不明遺構、 P26	20	第29図 五斗遺跡・菅田遺跡（1区）出土木材 光学顕微鏡写真	47
第14図 1～4・26号溝出土遺物	21	第30図 出土土器関連グラフ	49
第15図 22・23号溝	22		
第16図 破壊小溝、11号溝出土遺物	23		

表 目 次

表1 調査体制	8	表5 遺物観察表（菅田遺跡（1区））	42
表2 遺構一覧表（五斗遺跡）	30	表6 樹種同定・放射性炭素	
表3 遺物観察表（五斗遺跡）	32	年代測定結果	44
表4 遺構一覧表（菅田遺跡（1区））	42		

図版目次

図版1	五斗遺跡 調査区全景、遠景	図版10	菅田遺跡（1区）調査区全景、完掘状態、 基本土層、湿地土層
図版2	五斗遺跡 調査区全景、完掘状態、 基本土層	図版11	菅田遺跡（1区）湿地土層、1・2号土坑
図版3	五斗遺跡 1・2・4・5号土坑	図版12	五斗遺跡 土器（1）
図版4	五斗遺跡 6～8号土坑	図版13	五斗遺跡 土器（2）
図版5	五斗遺跡 10・11号土坑、1～3号溝	図版14	五斗遺跡 土器（3）、土製品
図版6	五斗遺跡 4・21・26号溝、P26	図版15	五斗遺跡 土器（4）
図版7	五斗遺跡 11号土坑、21～23・26号溝、 1号性格不明遺構、P19・26、歛状小溝	図版16	五斗遺跡 土器（5）
図版8	五斗遺跡 歛状小溝、1号性格不明遺構	図版17	五斗遺跡 土器（6）
図版9	五斗遺跡 1号性格不明遺構、遺物集中、 杭列	図版18	五斗遺跡 土器（7）、石製品、木製品
		図版19	菅田遺跡（1区）土器（8）

凡　　例

- 1 本書掲載の地形図は、国土地理院発行の1/25,000「新発田」・「中条」・「稻荷岡」(平成22年)・「上赤谷」(平成27年)・「菅谷」(令和2年)・「天王」(平成14年)および1/2,500都市計画図を縮小したものである。
- 2 地形図・遺構図の方位記号は真北を示す。高さは海拔高で表す。
- 3 グリッド杭の国家座標系は世界測地系第Ⅲ区系である。基準となる杭とその座標については、五斗遺跡は第Ⅲ章1、菅田遺跡は第Ⅳ章1を参照願いたい。なお、北西・南東グリッド軸の方位は、真北に対して五斗遺跡N-54°59'4" W、菅田遺跡N-55°46'19" Wである。
- 4 掘図の縮尺は、遺構配置図は1/200、遺構平面図・断面図は1/20～1/80、遺物は1/3を基本とするほか1/4とし、適宜スケールと縮尺を示した。
- 5 土層説明および遺物の色調については、小山正忠・竹原秀雄2006『新版 標準土色帖』28版 日本色研事業株式会社を使用した。
- 6 遺構図に示した遺物の原位置は、土器を●、木製品を■として表した。
- 7 遺構写真で、スケールとして用いたピンボールは、直線部分が50cmの長さである。
- 8 引用・参考文献は巻末に一括掲載し、本文中では著者と発行年を括弧書きで示した。ただし、第V章は章末に記した。
- 9 掘図中のスクリーントーンで示す範囲は、下記の内容を表す。



第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

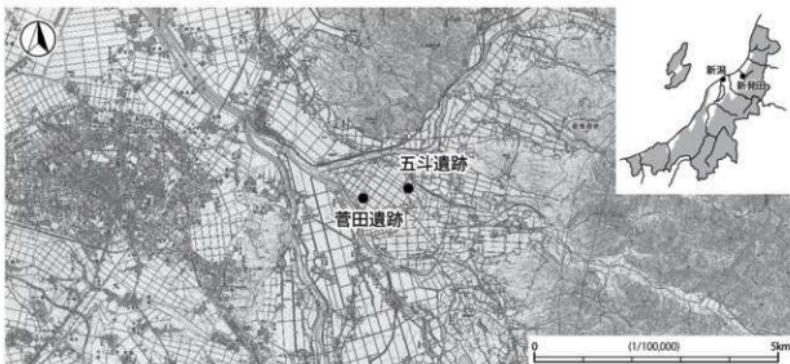
1 遺跡の位置と立地

五斗・菅田遺跡が所在する新潟県新発田市は、新潟市の東方約26kmに位置する総面積533.1m²、人口約9万6千人の地方都市である。現在の市街地は、旧新発田藩の城下町を中心形成されており、新発田城を代表とする歴史的建築物をはじめとして、区割りや道路、新発田川などの水路にかつての痕跡がみられる。その周囲を水田地帯が取り囲む。

市域の西部は海岸線に平行して砂丘列が走り、その内陸部には扇状地・冲積地が広がる。東部には柳形山脈・二王子山塊・五頭山地などの広大な山地が連なり、これらの山々から流下する中小河川を合わせた加治川が市域中央部を流れる。現在の加治川は、大正3（1914）年の放水路開削により、日本海に直接注いでいるが、かつての流れは下流で砂丘に阻まれ、塩津潟（紫雲寺潟）などに注ぎ込むほか、砂丘列に沿って西下し、阿賀野川へ合流していた。よって放水路開削以前の市域西部は、潟湖や湿地帯が広がっていた。近年の発掘調査成果からは、これらの湿地帯に点在する微高地に集落が営まれていたことが判明しており、内水面を利用した流通が盛んであったと推測されている（本田ほか2015）。

五斗遺跡は、二王子岳から流下する三光川により開析された河成段丘（国土地理院1993）の縁辺部に立地する。現況は水田で、東から西に向かい緩やかに傾斜する。現在の標高は約18mである。遺跡周辺には、二王子岳を水源とする三光川などが南東から北西方向に流れ、坂井川に合流する。坂井川は、新発田市早道場で姫田川に合流する。かつての坂井川は柳形山脈の南端を巻き、流れを北に転じ、塩津潟（紫雲寺潟）に流れ込んでいたと考えられている（渡邊2014）。

菅田遺跡は、姫田川と坂井川に形成された河成段丘の低位面（国土地理院1993）に立地する。低位面は開析の度合いが低く、緩傾斜の平坦地となっている。現況は水田で、東から西に向かい緩やかに傾斜する。現在の標高は約15mである。



第1図 遺跡の位置

両遺跡は、上記の河川群に挟まれた地点に立地する。古くからこれらの河川の氾濫に悩まされてきた地域でもある（菅 1956）。

2 歴史的環境と周辺の遺跡

新発田市とその周辺には、旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が存在する。旧石器時代、縄文時代の遺跡は丘陵や山麓部に多く、平野部に少ない。弥生時代の遺跡は総じて少なく、古墳時代の遺跡は、平野部に多い。本報告書では、これらのうち報告遺跡と関連する古代と中世の遺跡について述べる。

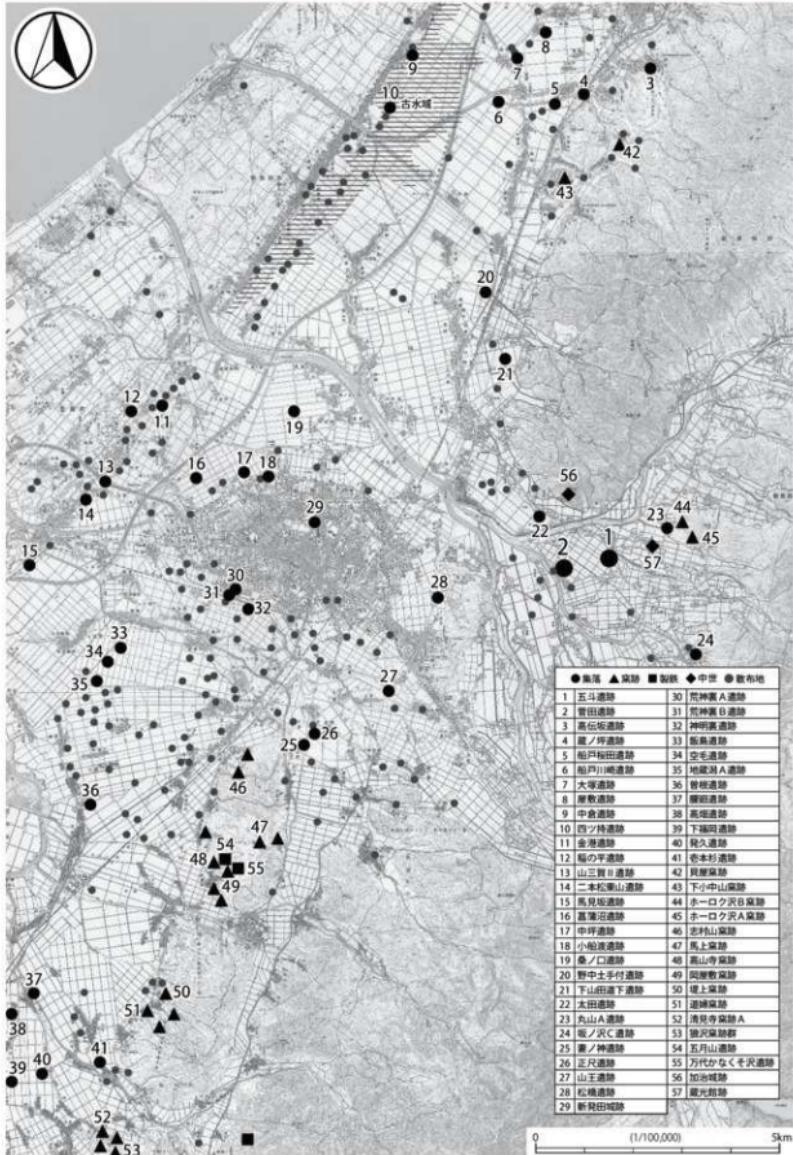
古代の新発田市域の広い範囲は、沼垂郡賀地郷に属していたと考えられている（桑原 1980）。10世紀頃に成立したとされる『和名類聚抄』では、沼垂郡は小郡に分類されており、足羽・沼垂・賀地の3郷が記されている。沼垂郡衙の位置は不明であるが、官衙に関連すると考えられる遺跡が福島潟や塩津潟（紫雲寺潟）などの潟湖周辺に、いくつか見つかっている。福島潟辺の砂洲には、曾根遺跡（36）があり、「郡」「上殿」などの墨書き土器や「門縦」と記された木簡、円面鏡が出土し、郡衙関連遺跡の可能性が指摘されている（家田ほか 1981・1982、川上 1997）。同じく福島潟周辺の阿賀野市発久遺跡（40）は歴様木簡・返抄木簡・健兒木簡・養食木簡などが出土し、国の北方政策関連施設の可能性が示唆されている（川上ほか 1991）。塩津潟（紫雲寺潟）周辺には、胎内市蔵ノ坪遺跡（4）がある。国司（少目）の関与が指摘される「少目御館米五斗」と記された荷札木簡と「津」の墨書き土器が出土しており、内水面を利用した周辺の物資集積に関わる港施設の役割が想定されている（平川ほか 2002）。

新発田市周辺の古代の集落遺跡は8世紀中頃から増加し、9世紀前半にピークを迎える。西側の砂丘列には、



第2図 遺跡の立地

（新潟県 1972『下越開発地域土地分類基本調査農地部農地計画課「地形分類図新発田」新発田』を元に作成）



第3図 周辺の主な古代・中世道路

山三賀Ⅱ遺跡（13）、金港遺跡（11）、二本松東山遺跡（14）、馬見坂遺跡（15）がある。なかでも山三賀Ⅱ遺跡は8世紀から9世紀後半に営まれた大規模集落で、律令国家の主導による集落形成の可能性が指摘される（坂井1989）。沖積地には、飯島遺跡（33）、空毛遺跡（34）、地蔵潟A遺跡（35）がある。空毛遺跡は、流路から呪符木簡や畜串などが出土し、水辺での祭祀行為が確認されている（鈴木・菅澤2012）。地蔵潟A遺跡は、赤彩土師器高杯や須恵器有台盤など周辺地域では希少な遺物が出土しており、内水面交通を利用して物資の流通を掌握する有力者が存在した可能性が指摘されている（本田・菅澤ほか2012）。

東部の山麓や丘陵部には、須恵器窯跡や製鉄遺跡が広範囲に分布している。櫛形山脈西麓には、8世紀前半の下小中山窯跡（43）、8世紀末の貝屋窯跡（42）がある。二王子岳西麓には、後述するホーロク沢窯跡がある。笛神丘陵には、須恵器窯や製鉄遺跡が密集し、8世紀前半の志村山窯跡（46）、9世紀中頃の狼沢窯跡群（53）など多くの遺跡がみられる。

報告遺跡周辺においては、三光川対岸1.5kmの二王子岳西麓に、集落・生産遺跡である丸山A遺跡（23）がある。8世紀後半から9世紀中頃にかけて営まれた遺跡で、これに近接するホーロク沢A・B窯跡（45・44）の操業も含めて、土師器・須恵器の生産・選別・出荷に関与していた集落と考えられている（渡邊ほか2014）。

新発田市域の遺跡の消長を見ると、8世紀中頃から後半に成立した遺跡は、9世紀後半には多くが廃絶している。一方、10世紀代の遺跡は、加治川扇状地の外側に広がる低地に桑ノ口遺跡（19）、報告遺跡と同じ段丘低位面に立地する太田遺跡（22）、姫田川右岸の河岸段丘上に立地する坂ノ沢C遺跡（24）など相対的に少ない。9世紀は『日本三代実録』に記される貞観地震や噴火などの自然災害が列島規模で頻発しており、当地域においても複数回の地震に伴う地盤沈下で、既存の潟が拡大し、後の塩津潟（紫雲寺潟）が形成されたと考えられている（高濱・ト郎2004）。この間に、集落再編などの何らかの画期があったことが想定されている（田中2011）。

中世は城館跡が多く、五斗遺跡の北西約1.6kmに位置する加治城跡（56）を始めとして、東約1kmに堀と土塁の一部を現在も確認することができる藏光館跡（57）がある。いずれもこの地を支配していた加地氏関連の遺跡である。菅田遺跡の位置する東姫田について、『川東郷土史料』（菅1956）は、「東、西、姫田の人達の語るには往古皇族のお姫様がこの地に落ち付かれ（中略）姫田」と当地の伝承に触れ、「姫と申すは加地佐々木家のお姫様で（中略）城南半里のこの地に一宇を建立した佐々木家では（中略）田地や未墾地も寄進（中略）それが姫の田。姫田…」とあり、地名の由来が紹介されている。

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯と調査体制

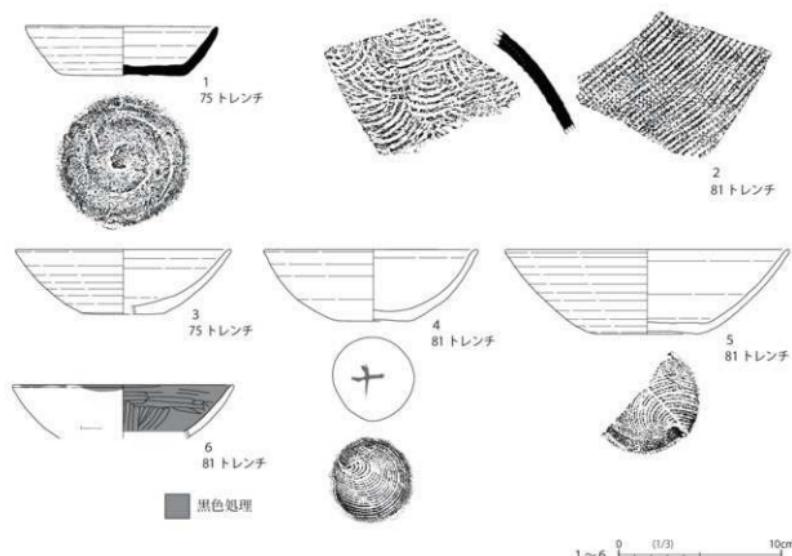
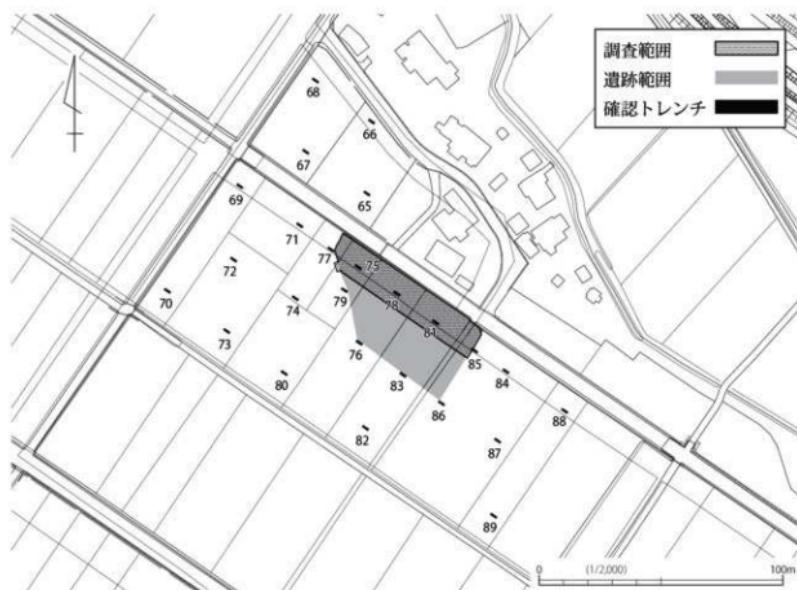
五斗遺跡・菅田遺跡が所在する経営体育成基盤整備事業 姫川右岸地区は、平成 28 年に事業が採択され、総事業面積は 268ha である。

分布調査と試掘調査 平成 25 年 4 月に、新潟県新発田地域振興局（以下、県振興局）から同地区の埋蔵文化財包蔵地に関する照会を受け、新発田市教育委員会（以下、市教委）は同地区全域の分布調査が必要と回答した。平成 28 年 3 月に市教委は同地区にて分布調査を実施し、11 か所を試掘・確認調査対象地とした。その後、県振興局と市教委は協議を行い、「下三光字川原地内」・「下三光字五斗地内」・「東姫田字菅田地内」の 3 か所で、平成 29 年 10・11 月に試掘調査を実施することで合意した。なお、以下の調査に係る体制は表 1 に掲載した。調査の結果、3 地点全てで遺跡の広がりを確認し、「下三光字川原地内」を開根遺跡（新発田市遺跡番号 704）、「下三光字五斗地内」（第 4 図）を五斗遺跡（同遺跡番号 705）、「東姫田字菅田地内」（第 5 図）を菅田遺跡（同遺跡番号 706）として周知化した。

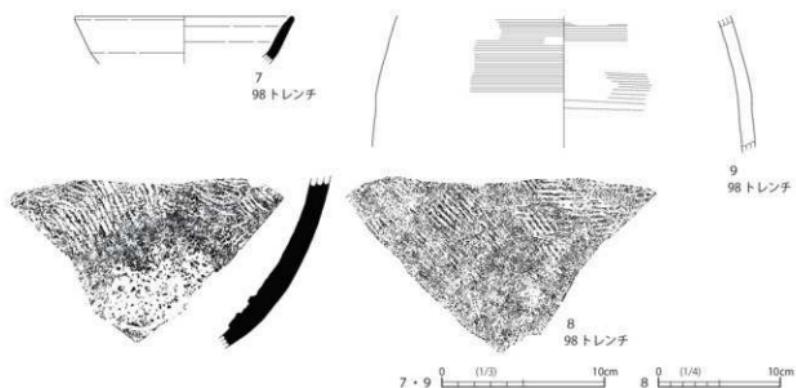
これを受け、県振興局と市教委はこれら 3 遺跡の取扱いに關し協議を行った。その結果、開根遺跡は設計を見直し遺跡全域を現状保存、五斗遺跡と菅田遺跡は面工事部分を現状保存、削平を免れない水路部分のみ本発掘調査を行う必要があると判断し、平成 31 年度（令和元年度）夏季に五斗遺跡、秋季に菅田遺跡の西半部（1 区）において現地調査を実施することで両者は合意した。

本発掘調査 この合意に基づき、県振興局長は、新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）へ文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 94 条第 1 項に則り、平成 31 年 2 月 21 日付け芝振農整第 950 号「埋蔵文化財発掘の通知について」で五斗遺跡の発掘を通知し、平成 31 年 3 月 14 日付け教文第 1621 号の 2 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で県教育長から本発掘調査の実施を通知された。これを受け、県振興局長は、平成 31 年 3 月 20 日芝振農整第 1051 号「五斗遺跡・菅田遺跡に係る発掘調査について（依頼）」で市教委へ両遺跡の本発掘調査の実施を依頼し、市教委は平成 31 年 3 月 26 日付け文行第 1240 号・2 「五斗遺跡・菅田遺跡に係る発掘調査について（回答）」で調査の実施を受諾した。これにより、県振興局と新発田市は、平成 31 年 4 月 26 日付けで「埋蔵文化財包蔵地発掘調査費用負担契約」を締結した。なお、調査費用の負担割合は例文を参照されたい。その後、新発田市は令和元年 5 月 28 日に「五斗遺跡・菅田遺跡 遺跡発掘調査業務委託」受託業者選定の入札を行い、令和元年 5 月 29 日に落札業者である株式会社吉田建設と委託契約を結んだ。また、市教委は、令和元年 6 月 17 日付け文行第 337 号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」で五斗遺跡本発掘調査への着手を県教育長へ報告し、6 月 25 日から 9 月 26 日までの期間、株式会社吉田建設に業務を委託して五斗遺跡の現地調査を実施した。

菅田遺跡（1 区）については、県振興局長は令和元年 5 月 24 日付け芝振農整第 86 号「埋蔵文化財発掘の通知について」で文化財保護法第 94 条第 1 項に則り県教育長へ発掘を通知し、令和元年 6 月 13 日付け教文第 177 号の 2 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で県教育長から本発掘調査の実施を通知された。その後、市教委は令和元年 9 月 25 日付け文行第 716 号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」で県教育長へ菅田遺跡（1 区）の本発掘調査への着手を報告し、令和元年 9 月 27 日から 10 月 25 日までの期間、



第4図 五斗遺跡調査範囲と確認トレンチ



第5図 菅田遺跡（1区）調査範囲と確認トレンチ

株式会社吉田建設に業務を委託して菅田遺跡（1区）の現地調査を実施した。

表1 調査体制

平成29年度（五斗遺跡・菅田遺跡 試掘調査）			
調査主体者 新発田市教育委員会（教育長 大山 康一）	調査担当者 本田 祐二	（文化行政課主任）	
監理 平山 真（文化行政課長）	調査員 坂野 信史	（文化行政課臨時職員）	
総括 坂井 真行（文化行政課課長補佐）	庶務 渡邊美穂子	（文化行政課埋蔵文化財係係長）	
平成31・令和元年度（五斗遺跡・菅田遺跡（1区）本調査、整理作業）			
調査主体者 新発田市教育委員会（教育長 工藤 ひとし）	監督員 本田 祐二	（文化行政課主任）	
監理 平山 真（文化行政課長）	調査担当者 伊藤 正志	（株式会社吉田建設 主任調査員）	
総括 横山 利弘（文化行政課課長補佐）	調査員 長沼 吉嗣	（株式会社吉田建設 主任調査員）	
統括監督員 渡邊美穂子（文化行政課埋蔵文化財係係長）	庶務 渡邊美穂子	（文化行政課埋蔵文化財係係長）	
令和2年度（五斗遺跡・菅田遺跡（1区）報告書作成）			
調査主体者 新発田市教育委員会（教育長 工藤 ひとし）	監督員 本田 祐二	（文化行政課主任）	
監理 平山 真（文化行政課長）	調査担当者 伊藤 正志	（株式会社吉田建設 主任調査員）	
総括 小林 大作（文化行政課課長補佐）	調査員 渡邊美穂子	（文化行政課埋蔵文化財係係長）	
統括監督員 渡邊美穂子（文化行政課埋蔵文化財係係長）	庶務 渡邊美穂子	（文化行政課埋蔵文化財係係長）	

2 調査経過

現地調査（調査日誌抄）

5月29日～6月24日 仮設建物の設置、駐車場の設営、調査機材の搬入、調査区と周辺の整備を行う。

6月25日～28日 五斗遺跡の発掘調査を開始する。用水管の移設工事予定（8月中旬から）を鑑み、調査区を南北に二分し、南側調査区の西端から重機を用いて表土掘削を行う。遺構確認面のIV層に達するまでの旧耕作土中から、遺物が散見された。木橋とみられる溝を検出したが、断面観察によりII層（旧水田耕作土）を掘り込んでいることを確認し、近世以降の構築物と判断、除去した。表土掘削後、グリッド杭の打設を行った。

7月1・2日 人力で重機掘削の残土処理、調査区壁面の整形、攪乱掘削、壁際排水溝の掘削、小グリッドの打設などの作業を行う。攪乱は掘削し、遺構確認面より低くなるものは排水溝として利用した。

7月3日～8月9日 遺構精査・掘削、記録作成を行う。全体的に遺構の密度は薄いもののB・Cグリッドは遺構の重複があり、新旧関係の把握後に新しいものから掘削した。Eグリッド以東はIV層中に遺物の集中があつたことから、IV層上面検出の遺構を調査した後、さらに5～10cm掘削し、遺構と遺物の有無を確認した。また1号性格不明遺構の埋土をサンプリングした。6日にラジコンヘリ、高所作業車を用いて空中写真を撮影した。この期間は猛暑を記録する日がしばしばあり、熱中症対策に万全を期した。

8月19日～29日 用水管の移設工事に伴い、現場作業を一時中断した。その間は、遺物水洗、土壤洗浄、図面・写真的整理作業を行った。

8月30日～9月2日 現場作業を再開。重機を用い、北側調査区の表土掘削に着手する。

9月4日～10日 作業員を投入し、調査区壁面の整形、攪乱掘削を行った。南側調査区に比べ、攪乱の範囲は広い。攪乱内からも一定量の遺物が出土するため、排水溝を兼ねて掘削した。なお、攪乱は深いところで約30cmあるが、踏み外し事故防止のために深さ15cmの掘削に留めた。

9月11日～26日 遺構精査・掘削、記録作成を行う。南側調査区から伸びる遺構が主となるが、新たに土坑・溝などを検出し、掘削した。粗砂層部分に設けた深いトレンチに対しては、崩落防止の簡易土留めを施した。26日にラジコンヘリ、高所作業車を用いて空中写真を撮影し、平面測量を行った。試掘・確認調査の結果から湧水が心配されたものの、地山が吸水性に富んだ土質であったことや、周囲に巡る水田の用排水路によって地下水位が下がっていたことから、これに悩まされることなく五斗遺跡の調査を終えた。

9月27日～10月3日 五斗遺跡の終了確認後、菅田遺跡（1区）の発掘作業準備に入る。重機を用いた表土掘削は東端から開始した。表土直下の土層が一樣でないことから、作業員3名を先行投入し、南壁に沿って排水溝兼断面観察用トレーナーを掘削、遺構確認面の把握に努めた。表土掘削終了後にグリッド杭を打設した。

10月4日～23日 人力で重機掘削の残土処理、調査区壁面の整形、壁際排水溝の掘削を行った。遺構精査と断面観察から、調査区の大部分は粗砂と水生堆積物が堆積していることがわかった。19日は台風19号の影響で南側壁面が約2m崩落したため、崩落土の除去、簡易的な土留め工事をし、排水溝の復旧を行った。21日に園芸用脚立（3m）を用いて完掘近景写真を撮影し、平面測量をした。23日に終了確認を行った。また、この期間、五斗遺跡出土遺物に出土地点及び層位等を記す注記作業を並行して実施した。

10月26日～11月15日 菅田遺跡（1区）の撤収作業、仮設建物・駐車場の撤去、調査機材の搬出などを行った。

現地調査終了後、五斗遺跡については、令和元年10月23日付け文行第810号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」で県教育長へ発掘調査の終了を報告し、令和元年10月23日付け文行第808号「遺物発見届」を新発田警察署長へ、令和元年10月23日付け文行第809号「遺物保管証」を県教育長へそれぞれ提出した。なお、この遺物は令和元年12月2日付け教文第895号の3「埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）」で文化財認定を受けている。

菅田遺跡（1区）については、令和元年11月28日付け文行第912号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」で県教育長へ発掘調査の終了を報告し、令和元年11月28日付け文行第910号「遺物発見届」を新発田警察署長へ、令和元年11月28日付け文行第911号「遺物保管証」を県教育長へそれぞれ提出した。なお、この遺物は令和元年12月24日付け教文第988号「埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）」で文化財認定を受けている。

調査の結果、当初の想定よりも遺跡の遺存状態が不良であったことなどから、新発田市は令和2年2月10日付け文行第1117号「経営体育成基盤整備事業姫川右岸地区内 埋蔵文化財包蔵地発掘調査費用負担契約の変更について（お願い）」で、県振興局へ発掘調査費用負担契約の変更を依頼し、令和2年2月10日付けで変更契約を締結した。県振興局への事業の完了報告書は、令和2年3月19日付け文行第1260号で提出している。

整理作業

令和元年11月1日～令和2年2月28日 基礎整理作業を行った。遺構は、番号の振り直し、図面表記の統一、平面図と断面図の整合と修正、断面図トレース、遺構写真のリネームなどの作業を行った。出土遺物は、土器接合作業後に、遺跡の年代や性格を示すと思われる必要な遺物を抽出し、実測、観察、トレースを行った。出土した木製品は樹種同定、放射性炭素年代測定を、外部の分析機関に委託して実施した。遺構、遺物とともに計測値や所見等をまとめた観察表を作成した。また、これらの作業の進捗と関連させながら、現場で作成した図面、写真、測量データ等の台帳を作成した。

令和2年度は発掘調査報告書作成のため、令和2年5月7日付けで県振興局と新発田市の間で発掘調査費用負担契約を締結し、5月22日に新発田市は発掘調査報告書作成業務について株式会社吉田建設と随意契約により業務委託契約を締結した。

6月1日～8月31日 試掘調査出土遺物の実測・トレース、遺物の写真撮影、報告書原稿執筆、図版版下作成、編集作業を行った。印刷・刊行は令和3年2月8日である。

3 遺構と遺物の記載方法

遺構

遺構の掲載・記述は、遺構ごとに番号順とした。遺構番号は土坑・溝・性格不明遺構など種別に分け、発掘調査終了後の整理作業で新たに付したものである（現場段階では遺構種別に関係なく、通しの仮番号とした）。欠落している遺構番号は、整理作業における検討の結果、遺構ではないと判断したものである。

平面・断面形の分類は（加藤 1999）に準じている。深さは検出面からの計測値である。掲載遺構の縮尺は各図にスケールで明示した。各遺構の計測値などの詳細は、遺構一覧表に記載している。

遺物

遺物は土器、石製品、木製品が出土した。コンテナ換算 ($60 \times 40 \times 10.6\text{cm}$) で五斗遺跡は 11 箱、菅田遺跡 (1 区) は 1 箱である。掲載は遺構ごととし、遺構外出土のものが続く。須恵器杯類・壺類・甕、土師器碗・甕・鍋、黒色土器碗・皿、石製品、木製品の順である。個々の遺物の詳細は遺物観察表に記載した。

器種分類（第6図）

出土数の大半を食膳具が占め、遺存状態が良好な個体が多数ある一方、煮炊具は少数かつ遺存状態が不良という出土傾向から、遺物の分類は、食膳具（杯類・無台椀）に絞った。器種ごとに器形による区別を A 類・B 類・C 類、細部の形状や成形・調整技法による区別を 1 類・2 類とし、これらを組み合わせて表記した。また、口縁部から底部まで遺存する個体は器高指数（器高／口径 × 100）を割り、器形の検討に用いた。

遺物の分類・年代については春日真実氏（春日 1999・春日ほか 2004）、笹澤正史氏（笹澤 2012・2014・2019）の先行研究に基づいた。

〈須恵器〉 食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具には無台杯・有台杯・杯蓋があり、貯蔵具には短頸甕・長頸甕・横瓶・甕がある。

無台杯 丸底を A 類、平底を B 類とした。口縁部が内湾するものを 1 類、外傾・外反するものを 2 類とした。

有台杯 口径 11 ~ 14cm、器高指数 35 以下の有蓋浅身を A 類、口径 11cm 以下で器高指数 40 以上の無蓋深身を B 類とした。高台が外反するものを 1 類、内傾するものを 2 類とした。

杯蓋 天井部が丸みを帯び内湾気味に口縁部へ至る器形を A 類、浅身で扁平な器形を B 類とした。

短頸甕 1 点出土しているのみである。肩が張り、短い直口口縁が付く。

長頸甕 3 点図示した。いずれも口径 10cm 未満である。肩が張り、やや外反する頸部が付く。

横瓶 3 点図示した。胴部は俵型を呈し、短い口縁部を持つ。円錐閉塞痕が確認できるものがある。

甕 胴部をタタキ成形し、広口の口縁部が付くもの。

〈土師器〉 食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具には無台杯、無台椀、煮炊具には甕・鍋がある。

無台杯 1 点出土しているのみである。

無台椀 器高指数 30 未満を A 類、30 以上を B 類、精製された胎土を用い、二次調整を施すものを C 類とした。A・B 類は口縁部が内湾するものを 1 類、外傾・外反するものを 2 類とした。C 類は体部下面下半においてロクロケズリを施すものを 1 類、ロクロケズリ後にミガキを施すものを 2 類とした。

甕 小甕と長甕がある。頸部が「く」の字状を呈する。口縁端部が丸いものと上方に摘み上げるものがある。平行タタキを施し、外面をカキメ調整する個体もある。

鍋 頸部がゆるく「く」の字状を呈する。口縁部を上方に摘み上げるものがある。

〈黒色土器〉 器種は無台椀・有台椀・有台皿がある。精製された胎土を用いたものが多い。

無台椀 内面のみに黒色処理を施すいわゆる内黒が主体を占める。底面付近の体部外面はロクロケグリ後ミガキ調整をし、内面にミガキを施す個体が多い。器高指数 35 未満を A 類、35 以上を B 類とし、口縁部が内湾するものを 1 類、外傾・外反するものを 2 類とした。

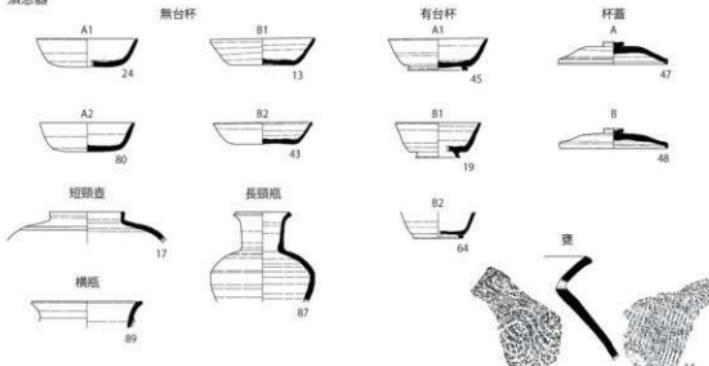
有台椀 1 点出土しているのみである。内外面ともミガキ調整後、黒色処理を施す。口縁部が外反する。

有台皿 内外面ともミガキ調整後、黒色処理を施す。

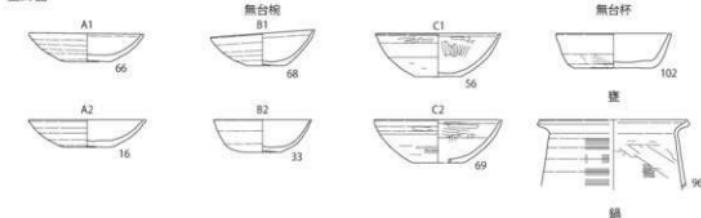
〈土製品〉

円筒形土製品 土管状の筒形土器である。

須恵器



土器器



黒色土器



第6図 器種分類

第 III 章 五斗遺跡の遺構と遺物

1 グリッド設定と基本土層

調査区とグリッドの設定（第7図）

五斗遺跡の調査に際し、調査範囲全体にかかるグリッドを設定し、遺構・出土遺物の位置把握に利用した。グリッドは世界測地系第VII系に沿って、10 mの方眼を組み、これを大グリッドとした。起点となる「Aa1-1」は X=216707.258, Y=78577.185 である。大グリッドの呼称は北西から南東へ A・B・C…のように大文字アルファベット、北東から南西へは a・b のように小文字アルファベットを用い、これを組み合わせて Aa・Ba…のように示した。さらに大グリッド内を 25 分割し、西から東に 2 mごとに 1・2・3・4・5、北から南も 2 mごとに 1・2…とアラビア数字を付し、1-3・3-4などのように示した。具体的には「Ab2-3」・「Ca4-1」のように表記される。調査に使用したグリッドは「Aa1-1」と「Ah1-1」を結ぶ軸線で、真北方向に対し西に 54° 59' 4" 傾いている。測量基準座標と標高値は、二級水準点の工事用打設杭（基 II -5、H=17.898）と四級水準点 B84・B85・B87（H=18.147）を視準し、調査区周辺に仮杭を打設し計測している。

基本土層（第7図）

調査前の地表高は 18.5 m 前後で、東から西へごく緩やかに傾斜する。基本土層は、調査区外周の任意の 12 地点で観察・記録した。層序は I～VI 層に大別でき、各観察地点によっては、色調・含有物などにごくわずかな相違が認められる。I～III 層は現代から近世の水田耕作土である。本来堆積していたと思われる古代の遺物包含層（IV 層）は、後世の水田耕作に伴う土地変更などにより削平された可能性が高く、D～F グリッドでわずかに確認できる程度である。

いわゆる地山とした V 層は、上面が遺構確認面である。削平により平坦面が作出されているが、土質は各地点で一様でない。各地点とも灰オーリープ色であることは共通するものの、調査区の西半（A～C グリッド）ではシルト、東半（D～H グリッド）はシルトや砂などが堆積し、これらが複雑に入り組むことから、本来は凹凸のある微地形が形成されていた可能性がある。また、粗砂層（旧流路）も看取でき、頻繁な洪水に見舞われていたことが想像できる。なお土質や粘性の違いにより 6 種に細分した。以下に、各層の概要を記す。

I 層…水田耕作土。黒褐色粘土。古代～現代の遺物が出土する。

II 層…旧水田耕作土。黒褐色粘土。古代～近世の遺物が出土する。

III 層…近世の水田耕作土。黒色シルト。古代～近世の遺物が出土する（第V章、材 2～4 の年代測定結果を参照）。

IV・V 層との層理面は水田耕作による踏み込み痕、耕作痕が顕著。

IV 層…遺物包含層。灰オーリープ色シルト。D～F グリッドのみにみられる。遺物が定量出土することから、削平を免れた遺物包含層の可能性がある。

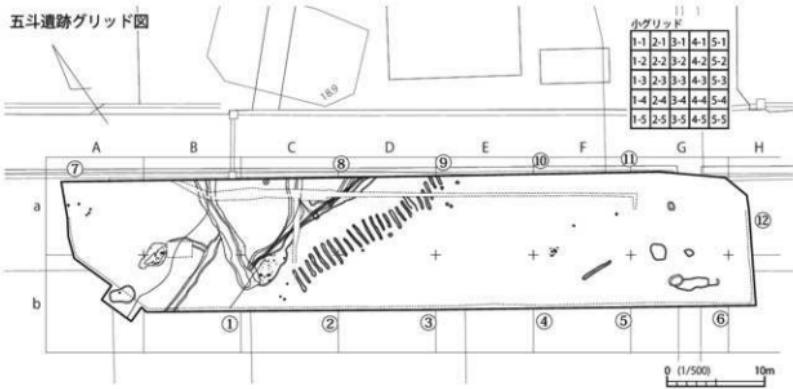
V 層…上面が遺構確認面。灰オーリープシルト色～砂。地点により、堆積状況や土質が異なる。以下に細別した。

V a 層…灰オーリープ色砂。

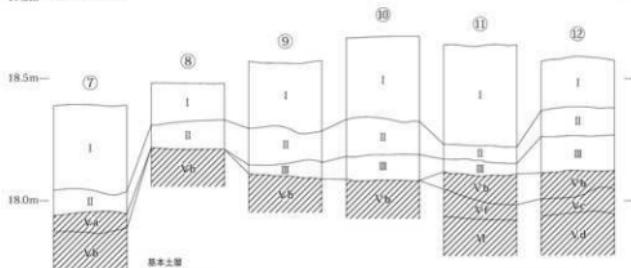
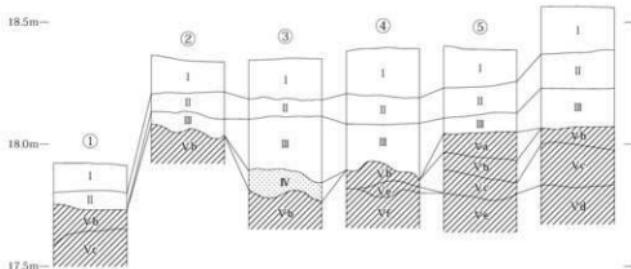
V b 層…灰オーリープ色シルト。

V c 層…灰オーリープ色砂質シルト。

V d 層…灰オーリープ色シルト。



五斗遺跡基本土層



基本土層

- I層 小山耕作土
黒褐色粘土 (10YR5/1)。堅利や少強。しまりや少強。
耕利。耕わずかに含む。
- II層 小山耕作土
黒褐色粘土 (10YR5/1)。土壌に腐殖するも、耕利。耕ごくわずかに含む。
- III層 小山耕作土
黒褐色粘土 (10YR5/1)。堅利。
- IV層 腐物化土質
黒色シルト (10Y2/1)。堅利。強。
- Vb層 腐物化土質
灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性なし。しまり強。
- b層 灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性弱。しまり強。
- c層 灰オーブ色砂質シルト (7.5Y5/2)。堅性やや強。しまり強。
- d層 灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性やや強。しまり強。
- e層 灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性弱。しまり強。
- f層 黒褐色シルト (7.5Y5/2)。堅利。
- g層 灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性弱。しまり強。
- h層 黑褐色シルト (7.5Y5/2)。堅利より堅利が大きい。
- i層 灰オーブ色シルト (7.5Y5/2)。堅性やや強。しまりや少強。
- j層 黑褐色シルト (7.5Y5/2)。堅利に腐殖するもやや堅利を含む。

0 (1/20) 1m

第7図 五斗遺跡グリッド図、基本土層

V e 層…灰オリーブ色砂。粗砂をごくわずかに含む。

V f 層…灰オリーブ色砂質シルト。V c 層に類似するが、粒径はより大きい。

VI 層…灰オリーブ色シルト。V b 層に類似するが、粘性はやや強く、黒味を帯びる。

2 遺構・遺物の概要

検出した遺構は、土坑 9 基、溝 8 条（畝状小溝を除く）、畝状小溝 1 群、性格不明遺構 1 基、杭列 1 列（杭 6 本）、ピット 25 基である。調査区東から中央付近にかけて、やや集中する傾向があり、土坑や溝などが重複する。

V 層は、後世の土地改変に伴う削平、または水田耕作による擾拌の影響を強く受けしており、遺構の遺存状態は良くなく、概して浅いものが多い。遺構底面付近のみ遺存していた可能性が高い。遺構は、居住に直接関わる掘立柱建物や堅穴建物などがみつかっていない一方、溝や烟の跡と考えられる畝状小溝を検出した。溝は同方向の重複がみられ、幾度かの掘り直しが推測できる。なお、溝と畝状小溝の配置は、概ね直交する。

遺構埋土は、黒色系と地山（V 層）に近似する灰色～灰オリーブ色系に二分できる。黒色系の遺構検出は、比較的容易であったものの、灰色系の遺構埋土は、目視による識別が難しく、地山との土質の違いを見定めて遺構の検出を行った。特に後者については、サブトレーンチを設定し、断面も慎重に観察した上で遺構と認定した。

遺物は、8 号土坑、1 号性格不明遺構、遺物集中から比較的まとまって出土している。古代の須恵器無台杯・有台杯・壺・瓶・甕、土師器無台椀・甕・鍋、黒色土器無台椀・有台皿、土製品、石製品、杭などがあり、出土総量はコンテナ 11 箱分である。図化資料の選定に当たっては、Ⅲ 層出土でも遺存状態の良いもの、遺跡の年代や性格を示すと考えられるものなどを抽出している。須恵器の胎土については（春日 2019）を参考に判断した。ホーロークズ・道端窓跡などの阿賀北地域での生産のものが多くを占め、佐渡小泊窯産は少数であった。主体となる年代は、筆澤編年Ⅶ 期（筆澤 2019）（春日編年 VI 期並行）で、9 世紀中葉から第 3 四半期頃である。

また、V 層出土の杭と木材について、帰属時期を得るために放射性炭素年代測定を行ったところ、木材の多くは遺物の年代観よりも新しい結果を得ている（第 V 章参照）。

3 遺構と遺物各説

1 号土坑（第 9・11 図）

Ab グリッドに位置する。遺構の大半が調査区外に伸びると想定されたことから、調査区をわずかに拡張し調査した。埋土は、黒色シルトである。重複する遺構はない。I 層から黒色土器無台椀（10）が正位のつぶれた状態で出土した。B1 類で、口縁部内面に使用による擦れがみられる。

2 号土坑（第 9 図）

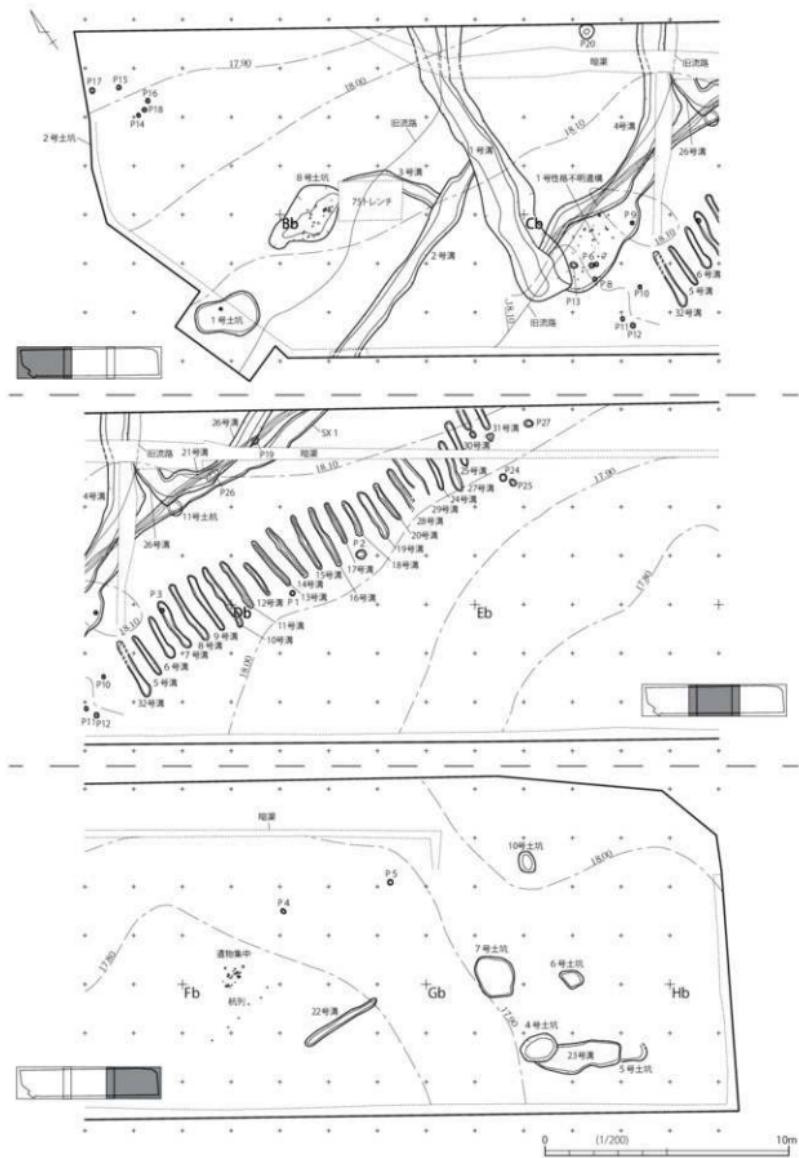
Aa グリッドに位置する。平面プランは、調査に伴い掘削した排水溝により確認できず、壁面の断面観察でのみ認識できた。擾乱の可能性もあるが、ここでは土坑と判断した。埋土は、2 層に分かれる。出土遺物はない。

4 号土坑（第 10 図）

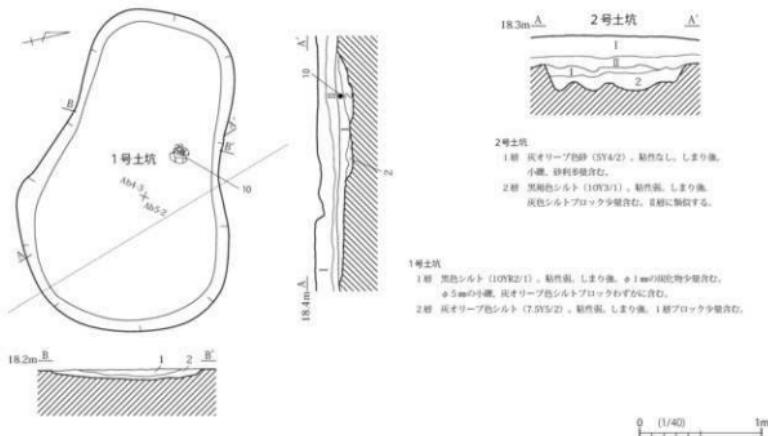
Gb グリッドに位置する。23 号溝と重複する。新旧関係は、本土坑が新しい。埋土は、暗褐色シルトと暗褐色砂である。出土遺物はない。

5 号土坑（第 10 図）

Gb グリッドに位置する。23 号溝と重複する可能性が高いが、明確でない。平面プランは黒色シルトがマープル状に広がっており判然としないが、サブトレーンチにおいて地山を掘り込んでいる断面が観察できた。出土遺物はない。



第8図 五斗遺跡遺構配置図



第9図 1・2号土坑

6号土坑（第10図）

Ga・Gb グリッドに位置する。断面形が弧状で浅い。埋土は、灰黄褐色シルトである。出土遺物はない。

7号土坑（第10図）

Ga・Gb グリッドに位置する。断面形は弧状で浅い。埋土は、粗砂を含む暗褐色粘土である。出土遺物はない。

8号土坑（第10・11図）

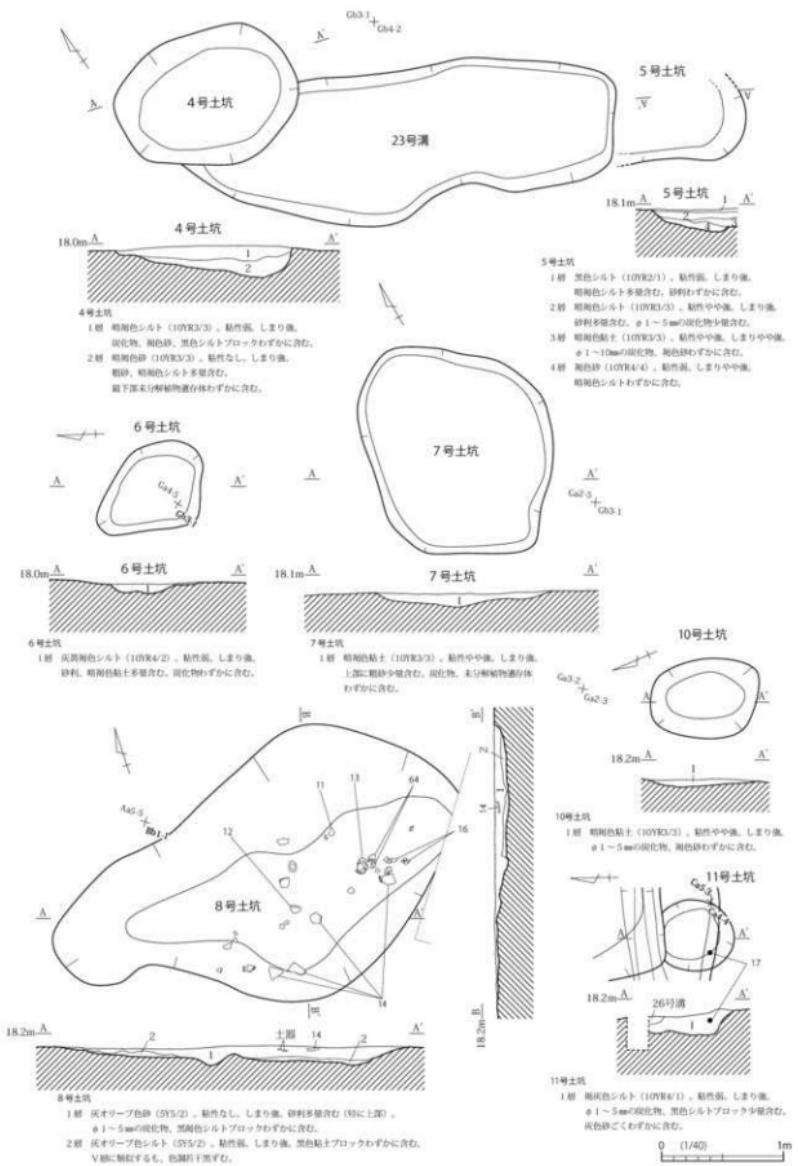
Ab・Ba・Bb グリッドに位置する。西端は確認トレンチにより壊されている。3号溝の延長上にあるため、同一遺構の可能性を考えたが、両者に堆積する土質が大きく異なることから、別遺構と判断した。平面プランは不整な楕円形で、断面は浅い弧状である。遺物は1層の上面から出土した。出土遺物は、須恵器無台杯（11～13）、甌（14）、短頸甌、土師器無台椀（15・16）、黒色土器無台椀である。11はA1類、12はA2類である。13はB1類で、佐渡小泊窯産である。14は焼成不良で、色調は浅黄色である。15は胎土が精良である。16はA2類で、底部外面に墨書「十」がある。

10号土坑（第10図）

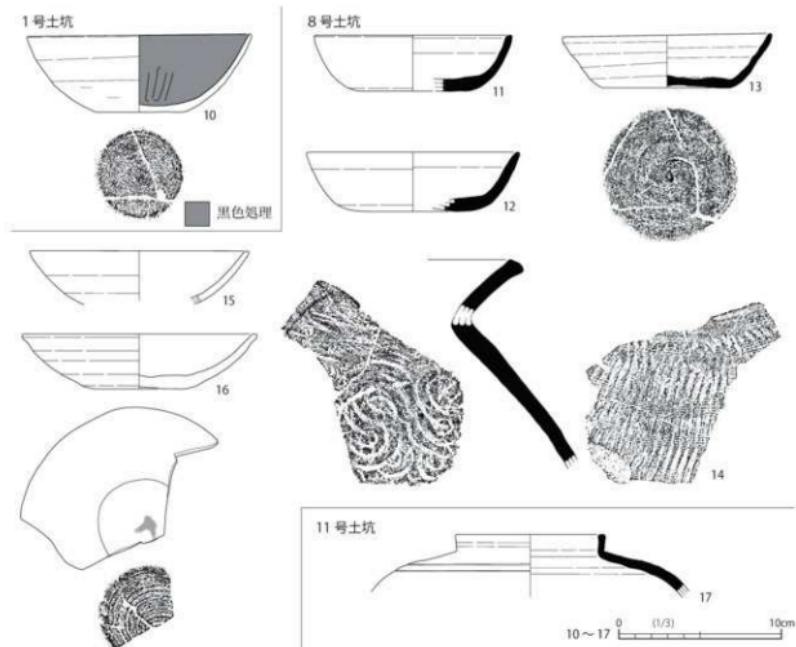
Ga グリッドに位置する。断面形は弧状で浅い。埋土は、暗褐色粘土である。出土遺物はない。

11号土坑（第10・11図）

Ca グリッドに位置する。1号性格不明遺構の底面で検出した。21・26号溝、1号性格不明遺構と重複する。新旧関係は、21号溝より新しく、26号溝・1号性格不明遺構より古い。遺物は、須恵器短頸甌（17）、土師器無台椀が出土した。17は肩部外面に2条の沈線が巡り、自然釉が薄くかかる。口縁部の自然釉は取看できないことから、蓋付で焼成されたと考えられる。



第10図 4~8・10・11号土坑



第11図 1・8・11号土坑出土遺物

1号溝（第12・14図）

Ba・Bb・Ca・Cb グリッドに位置し、直線的に調査区外の北へ伸びる。新旧関係は、P21より古く、2・4・21号溝、1号性格不明遺構より新しい。東側の立ち上がりにテラス状の段を持つ。遺物は、須恵器無台杯（18）、有台杯（19）・甕、土師器無台椀・甕・鍋、黒色土器無台椀が出土した。18はA1類であろうか。19は有台杯B1類。

2号溝（第12・14図）

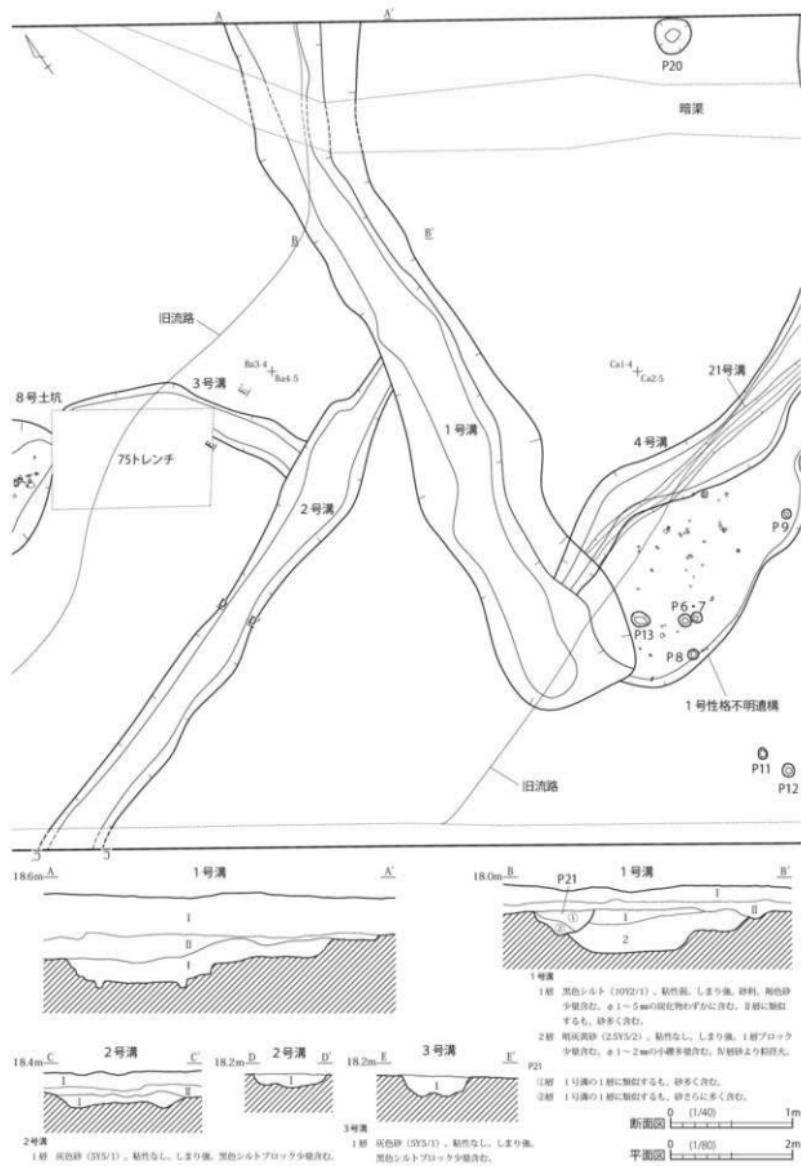
Ba・Bb グリッドに位置し、直線的に調査区外の南西へ伸びる。1号溝と一部重複し、本遺構が占い。遺物は、須恵器無台杯（20）、土師器鍋（21）・器種不明土師器片が出土した。20はA1類であろうか。21の体部外面は、タタキ成形後のカキメ調整がみられる。

3号溝（第12・14図）

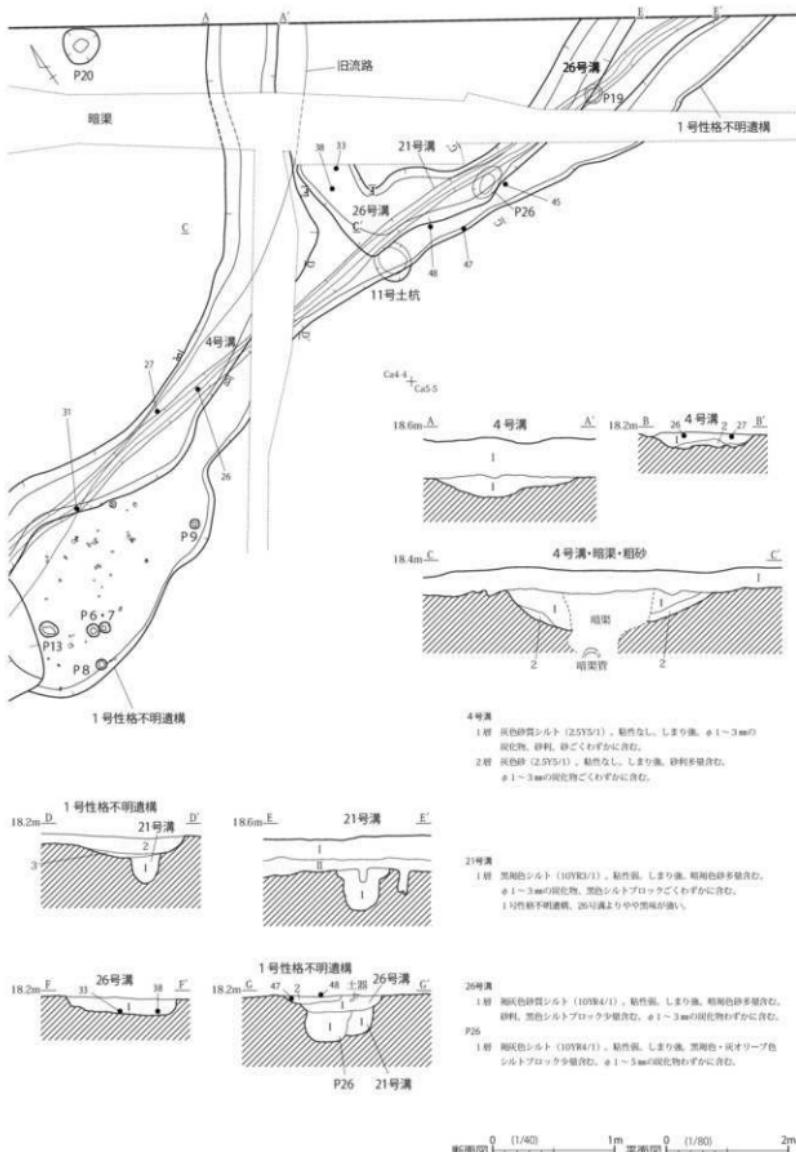
Ba グリッドに位置する。東側は確認トレーニチに壊されている。2号溝と一部重複するが、新旧関係は不明である。同時期に機能していた可能性もある。遺物は須恵器無台杯（22）、土師器鍋・器種不明土師器片が出土した。22はA1類であろうか。

4号溝（第12～14図）

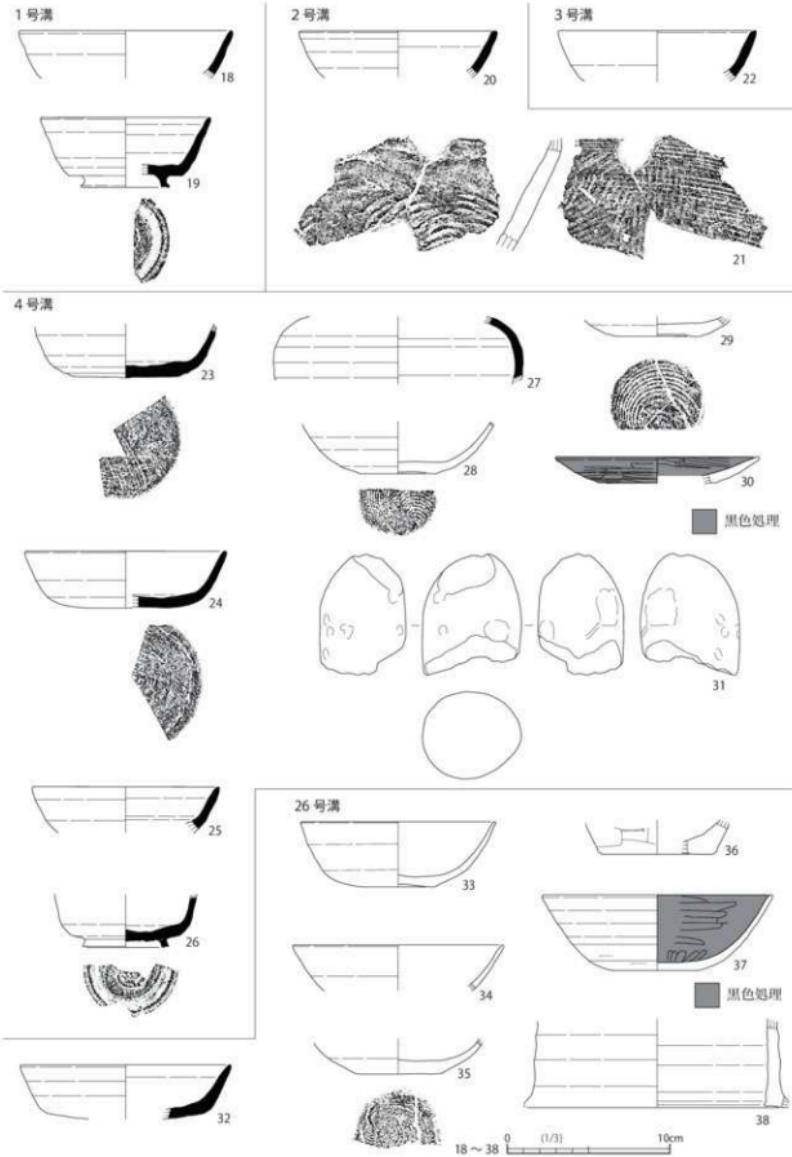
Ca・Cb グリッドに位置する。緩やかに湾曲し、調査区外へ伸びる。1・21号溝、1号性格不明遺構と重複する。新旧関係は、1号溝より古く、21号溝・1号性格不明遺構より新しい。遺物は、須恵器無台杯（23・24）・有



第12図 1～3号溝



第13図 4・21・26号溝、1号性格不明遺構、P26



第14図 1~4・26号溝出土遺物

台杯（25・26）・壺瓶類（27）・甕、土師器無台椀（28・29）・鍋、黒色土器無台椀・有台皿（30）、石製品（31）が出土した。23はA類、24はA1類で、1号性格不明遺構の出土破片と接合した。25は内面の底部に至る部分が急角度なことから、有台杯と判断した。26はB1類で、1号性格不明遺構の出土破片と接合した。27は肩部外外面に自然軸がわずかに付着する。瓶類の可能性もある。28・29は土師器無台椀で、分類は不明である。30は平高台皿であろう。外面は丁寧なミガキが施される。内面は使用による擦れがみられる。31は用途不明で、被熱している。自然縞の可能性がある。

21号溝（第12・13図）

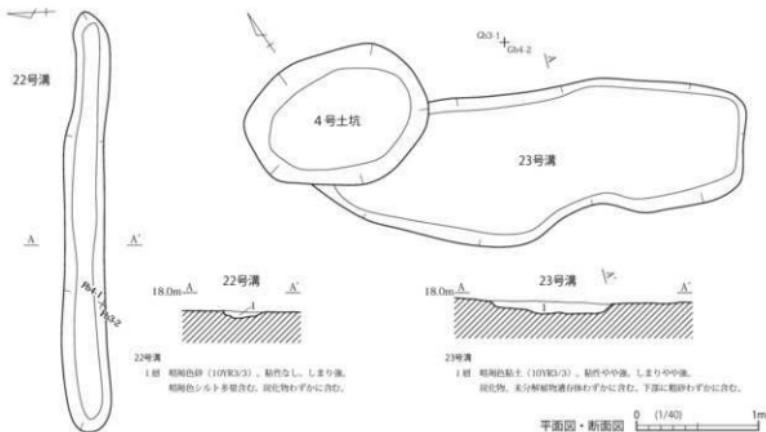
Ca・Cb・Daグリッドに位置し、調査区外の東へ伸びる。4号溝と1号性格不明遺構を掘削した段階で検出した。11号土坑、1・4・26号溝、1号性格不明遺構、P19・26と重複し、本遺構が最も古い。断面は半円ないしU字状である。出土遺物はない。

22号溝（第15図）

Fbグリッドに位置する。埋土は、暗褐色砂である。出土遺物はない。

23号溝（第15図）

Gbグリッドに位置する。4号土坑と一部重複する。新旧関係は、4号土坑より古い。5号土坑とも一部重複する可能性があるが、判然としない。埋土は、暗褐色粘土である。出土遺物はない。



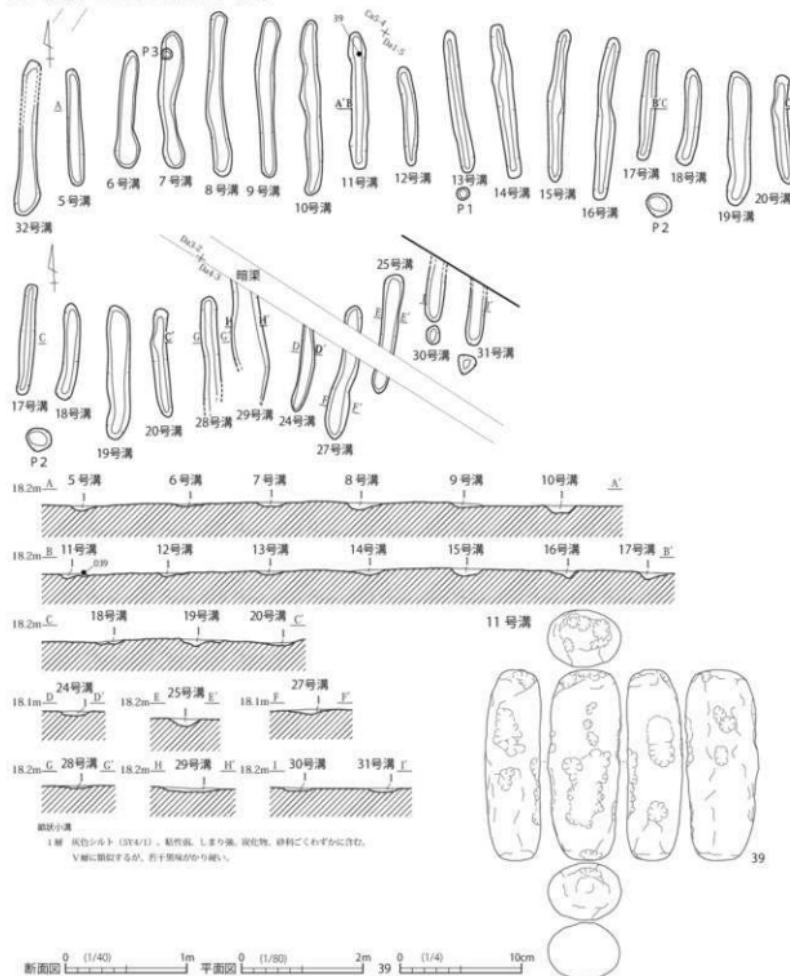
第15図 22・23号溝

26号溝（第13・14図）

Ca・Daグリッドに位置し、調査区外の東へ伸びる。11号土坑、21号溝、1号性格不明遺構、P19・26と一部重複する。新旧関係は、1号性格不明遺構より古く、11号土坑、21号溝、P19・26より新しい。平面形はL字状に屈曲する。溝の西側は、暗渠に壊されており、詳細は不明である。遺物は、須恵器無台杯（32）・甕、土師器無台椀（33～35）・小甕（36）・鍋、黒色土器無台椀（37）、円筒形土製品（38）が出土した。32はA2類で、口縁部外表面の重ね焼き痕が明瞭に観察できる。胎土中に長石を多量に含む。33はB2類、34・35の分類は不明である。36は小甕の底部片で、外面にヘラケズギが施される。37はA1類で、内面のほぼ全面に使用による擦れがみられる。38は円筒形土製品で、焼成は良好である。

歓状小溝（第16図）

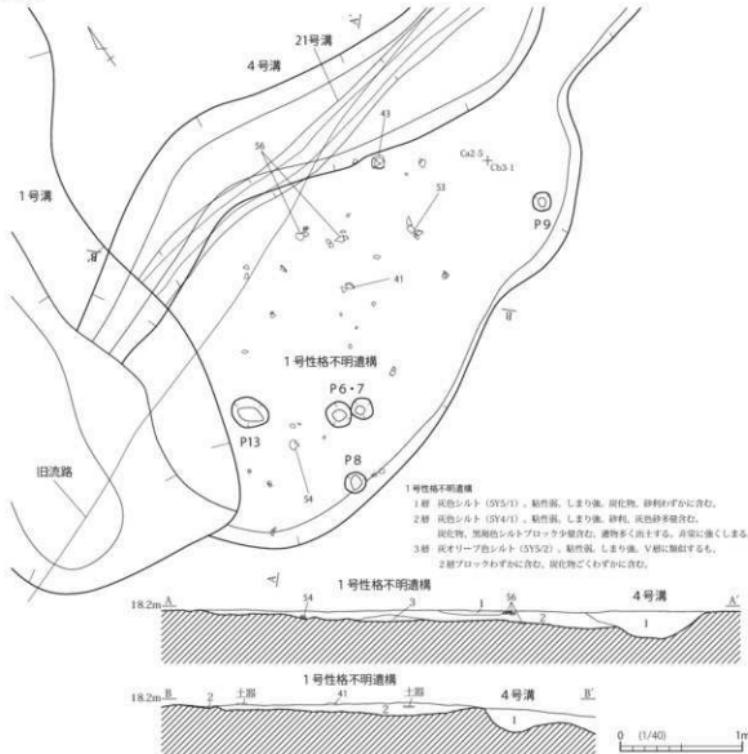
畑作における歓と歓の間に掘り込まれる溝（歓間）である。Ca・Cb・Da・Db・Ea グリッドに位置する。5～20・24・25・27～32号溝がこれにあたる。各溝は南北方向に伸び、北側に位置する21号溝、1号性格不明遺構と直交する位置関係にある。溝の間隔は、約50cmで整然と並び、規模は長さ159～288cm、幅22～49cm、深さ2～6cmである。遺物は、11号溝から敲石（39）が出土しているほか、須恵器や土師器が出土したが小破片のため、図示していない。



第16図 歓状小溝、11号溝出土遺物

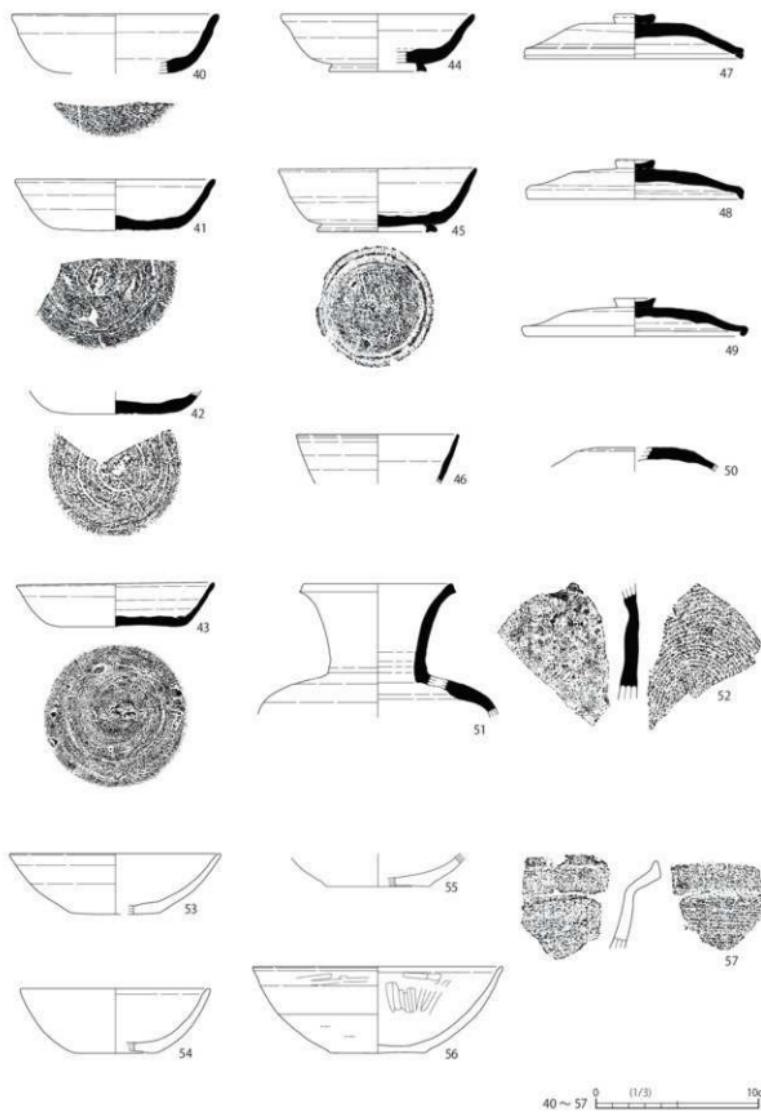
1号性格不明遺構（第12・13・17・18図）

Ca・Cb・Daグリッドに位置する。11号土坑、1・4・21・26号溝、P6～9・13・19・26と重複する。新旧関係は、1・4号溝より古く、11号土坑、21・26号溝、P6～9・19・26より新しい。埋土は、地山に類似するが、砂利を多く含み、非常に硬くしまっている。Ca5-1・5-2、Cb1-1・1-2・2-1・2-2で楕円形にふくらみ、溝状に東へ伸びる。断面は弧状で浅い。当初は、竪穴建物を想定して調査を行い、P6～9・13を検出したが、ピットの配置などから、本遺構を建物と判断するには至らなかった。遺物は、須恵器無台杯（40～43）・有台杯（44～46）・杯蓋（47～50）・長頸瓶（51）・横瓶（52）・甌・土師器無台碗（53～56）・甌・鍋（57）、黒色土器無台碗が出土している。40・41はA2類、42は底部のみの遺存でA類。43はB2類で薄手、内外面に黒斑がみられ、粘土粒（カマセ材）が付着する。佐渡小泊窯産である。44・45はA1類、46は直線的に立ち上がる器形からB類とした。47はA類、48・49はB類である。47・49は内面に墨痕がみられる。50は摘みを欠損する。51は口縁部内面と肩部外面に自然釉が薄くかかる。52は横瓶の閉塞部分。53はA1類、54はB2類、55の分類は不明である。56はC1類で、内外面にミガキが施される。57は口縁端部が上方に摘まれる。



第17図 4号溝、1号性格不明遺構

1号性格不明遺構



第18図 1号性格不明遺構出土遺物

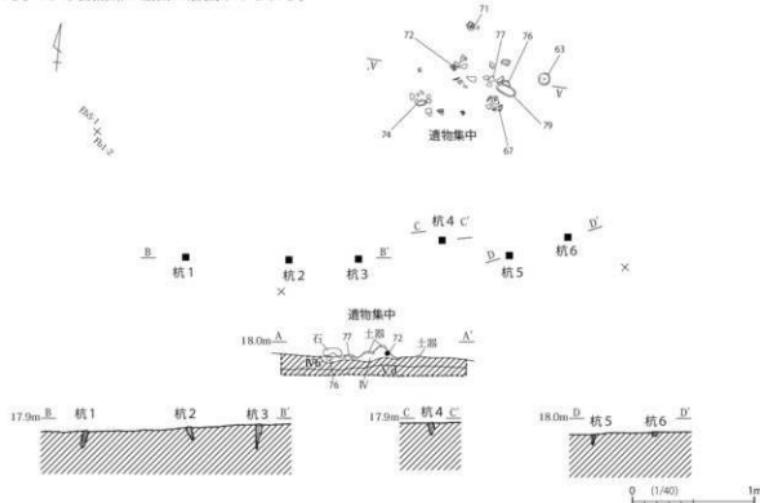
40~57 0 (1/3) 10cm

杭列（第19・20図）

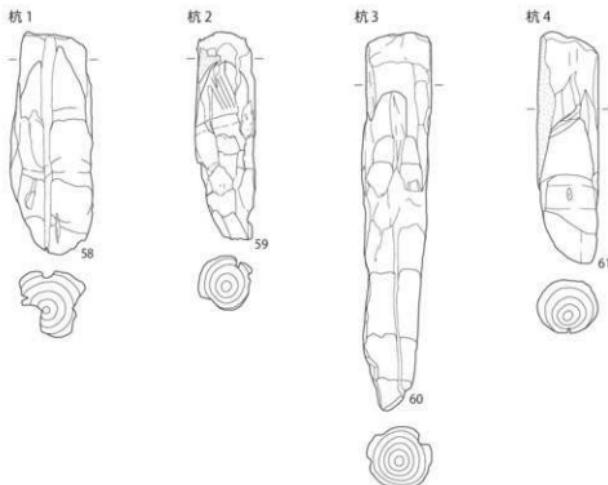
Fa・Fbグリッドに位置する。6本の杭がほぼ東西方向に並ぶが、その打ち込まれている深さは3~20cmと一定ではない。各杭の太さは5cm以下。樹種はいずれもヤナギ属である。杭の間隔は、広いところで85cm、狭いところで50cmである。放射性炭素年代測定を行ったところ、出土土器の年代観より新しい測定値となった（第V章参照）。ここでは、遺存状態がよいもの4本を図化した（58~61）。いずれも下端が一方向からの加工で整えられる。

遺物集中（第19~21図）

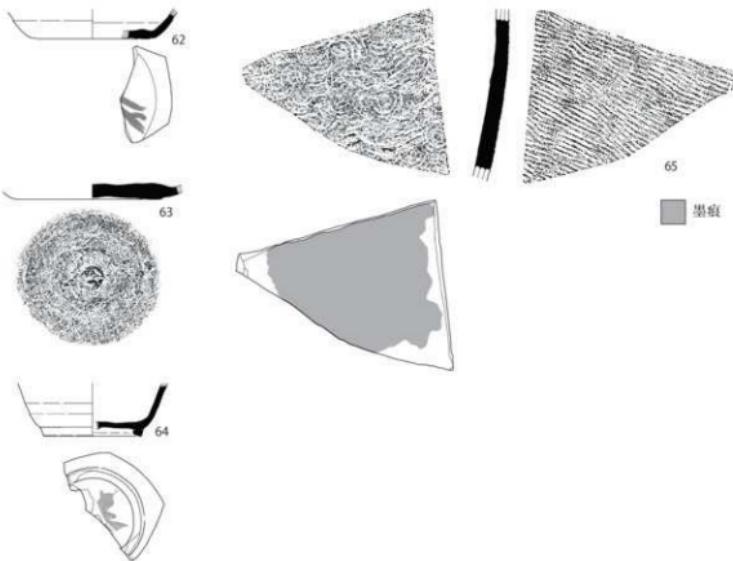
Fa・Fbグリッドから、遺物が集中的に出土した箇所があり、「遺物集中」として報告する。明瞭な遺構のプランは確認できなかった。削平をまぬがれた遺物包含層（IV層）の可能性がある。遺物が出土した土層は、炭化物と砂を含む灰オリーブ色シルトであり、その堆積は薄い。出土遺物の年代観から、短時間の廃棄によるものと推察できる。遺物は、須恵器無台杯（62・63）・有台杯（64）・横瓶（65）、土師器無台椀（66~71）・甕（72・73）・鍋、黒色土器無台椀（74~78）、石製品（79）が出土した。62はA類、底部外面に墨書きがあるが、判読できなかった。63は胎土の色調が白色で、底径が大きい。やや古い年代のもので笹澤編年V1~VI1期（春日編年IV2~V1期並行）に比定できる。64はB2類で、高台が底部外寄りに貼付される。底面に墨書きはあるが、判読できない。65は内面が著しく擦れしており、墨痕がみられる。転用硯と判断される。66はA1類で、内面は使用による擦れがみられる。底部外面に墨書き「仁」がある。67はA2類で、底部外面に墨書き「十」がある。68はB1類。69はC2類で、内外面とも丁寧なミガキが施される。70はロクロ成形の稜が残る。71は底部外面に墨書き「十」がある。72は小甕、73は底部付近の破片である。74・75はA1類、76はB1類で、いずれも内面に丁寧なミガキが施される。74の外面上半はロクロケズリ後のミガキ、口縁部内面は使用による擦れがみられる。75・76の外面上半はロクロケズリで整えられる。77・78の分類は不明であるが、内面に丁寧なミガキが施される。79は自然縛の全面に磨滅がみられる。



第19図 杭列、遺物集中



遺物集中



58 ~ 65 0 (1/3) 10cm

第 20 図 杭、遺物集中出土遺物（1）

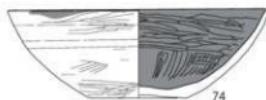
遺物集中



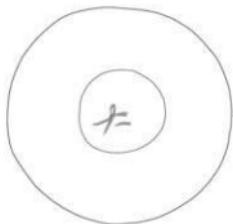
66



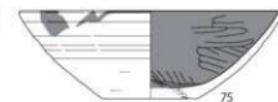
68



74



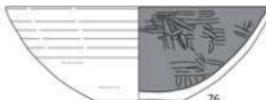
69



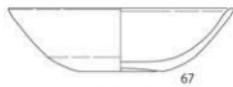
75



70



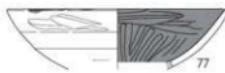
76



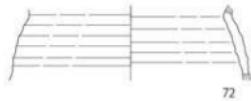
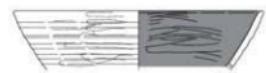
67



71



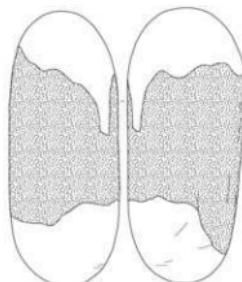
77



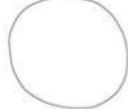
72



73



79



摩耗痕

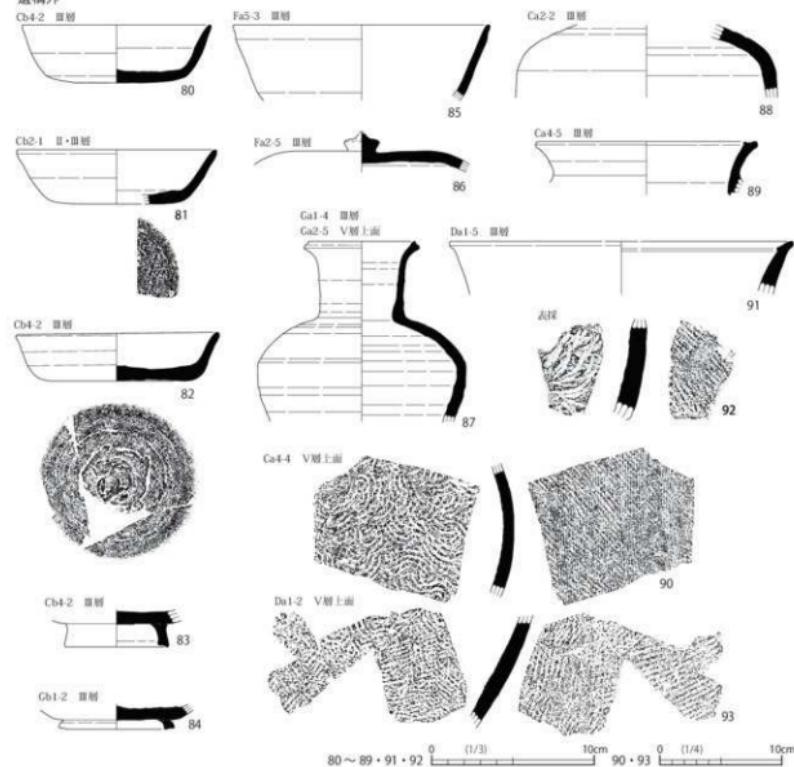
66 ~ 79 0 (1/3) 10cm

第21図 遺物集中出土遺物（2）

遺構外出土の遺物（第22・23図）

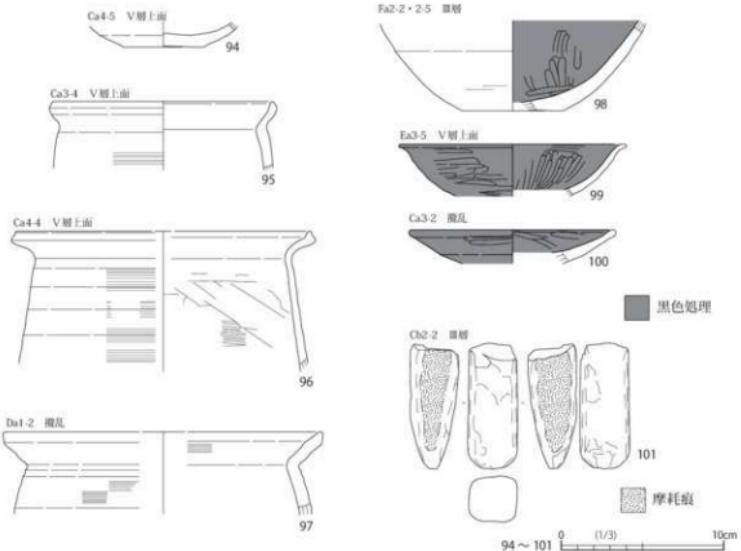
80～82は須恵器無台杯である。80・81はA2類、82はB2類で、内面の水挽き痕が顕著にみられる。81は体部が外傾し立ち上がる。82は浅身で底径が大きいことから、笠澤編年VI 1期（春日編年V 1期並行）に比定できる。83～85は須恵器有台杯。83は高台が高い。金属器を模倣したものである。85はB類で、内面に自然釉がかかる。86は須恵器杯蓋B類で、頂部の摘みは中央が高まる擬宝珠形である。87は須恵器長頸瓶で、薄手で口縁部内外面から肩部外面にかけて自然釉がかかる。88は須恵器長頸瓶の肩部片。87・88ともに佐渡小泊窯産である。89・90は須恵器横瓶である。89は口縁部、90は体部片で外面に自然釉がかかる。91～93は須恵器甕。91は口縁部片で内外面に自然釉がかかる。92・93は体部片で外面が擦れしており、砥石に転用されたものであろう。94は土師器無台椀の底部。95は土師器小甕。96・97は土師器長甕である。95・96の口縁端部は上方に摘み上げられる。98は黒色土器無台椀で、外面にロクロケズリ、内面にミガキが施される。99は黒色土器有台椀であろう。内外面とも丁寧なミガキが施される。100は黒色土器有台皿で、平高台の可能性がある。内外面は使用による擦れがみられる。101は砥石である。

遺構外



第22図 遺構外出土遺物（1）

遺構外



第23図 遺構外出土遺物（2）

表2 遺構一覧表

- ・重複遺構・新旧関係：＝は同時併存、≠は重複関係にあるが新旧関係は不明、>は新旧関係（（新）>（旧））
- ※ピット一覧表の重複関係・新旧関係は、直接的に切り合い関係にあるもののみを記載。

・出土遺物：○内の数字は掲載番号。

土坑

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	底面標高 (m)	断面形	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出 部位	検出 平面	検出 断面	写真 回数
1号土坑	Ab4-2・4-3・5-2・5-3	楕円形	254	179	14	18.02	弧状	黒色土器無台板(10)	重複無し	V	9		
2号土坑	Aa2-4				21	17.77	弧状	なし	重複無し	V			9
4号土坑	Gb2-2・3-2	楕円形	148	112	26	17.72	弧状	なし	> 23号溝	V			3
5号土坑	Gb5-2	(楕円形)	(108)	(70)	18	17.88	弧状	なし	重複無し	V			
6号土坑	Ga3-5・4-5.Gb3-1・4-1	不整形	84	70	8	17.85	弧状	なし	重複無し	V			
7号土坑	Ga2-5.Gb2-1	円形	170	153	11	17.84	弧状	なし	重複無し	V			10
8号土坑	Ab5-1.Ba1-5・2-5, Bb1-1・2-1	楕円形	352	200	15	17.94	弧状	遺直露無台杯(11-13)・甕(14)・短頭甕・土師器無台板(15-16)、黒色土器無台板	重複無し	V			
10号土坑	Ga2-3・3-3	楕円形	87	65	6	17.98	弧状	なし	重複無し	V			5
11号土坑	Ca4-3・4-4	円形	(56)	59	20	17.91	弧状	遺直露短頭甕(17)、土師器無台板	< 26号溝、1号不明、> 21号溝	V			5+7

溝

遺構名	グリッド	規格(cm) 長さ	幅	深さ	断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出 部位	検出 平面	検出 断面	写真 回数
1号溝	Ba3-2・3-3・4-2・4-3・4-4・4-5・5-3・5-4・5-5.Bb1-1・5-2.Ca1-3, Ca1-1・1-2	(1214)	172	36	台形状	N-10°-E	遺直露無台杯(11)・有台杯(19)・甕、土師器無台板・甕・漏、黒色土器無台板	> 2・4・21号溝、1号不明	V	12	12	5

満

遺構名	グリッド	規模(cm)			断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出		写真 面版	
		長さ	幅	深さ					剖面	削位		
2号溝	Ba4-4・4-5.Bb2-2・ 2-3・3-1・3-2・3-3・ 4-1	960	78	14	弧状	N-68°-E	須恵器無台杯(20)・土師器片・鏡(21)	< 1号溝、≠ 3号溝	V	12	12	5
3号溝	Ba5-5・5-5・4-5	803	60	17	円形狀	N-36°-W	須恵器無台杯(22)、土師器片・鏡(21)	= 2号溝	V			
4号溝	Ca1-5・2-5・3-2・3-3・ 3-4・3-5・4-3・4-4・ Cb1-1・2-2	(1048)	72	31	台形状	N-56°-E	須恵器無台杯(23・24)・有台杯(25・ 26)・甕・壺形瓶(27)・土師器無台杯(28・ 29)・鏡・黑色土器無台杯・有台瓶(30)・ 石製品(31)	< 1号溝、 > 2号溝、 1号不明	V	12・ 13	13	6
5号溝	Cb3-1・4-1・5-1	191	25	4	弧状	N-0°	土師器片	重複無し	V			
6号溝	Cb4-1・4-2	192	26	2	弧状	N-8°-E	土師器片	重複無し	V			
7号溝	Ca4-5.Cb4-1・5-1	224	31	3	弧状	N-0°	土師器片	> P3	V			
8号溝	Ca4-5・5-5.Cb4-1・5-1	270	26	6	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
9号溝	Ca5-5.Cb5-1	263	30	4	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
10号溝	Ca5-5.Cb5-1.Dg6-1	288	28	6	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
11号溝	Ca5-5.Da1-5.Dg6-1	275	26	4	弧状	N-0°	土師器無台輪・石製品(39)	重複無し	V			7・8
12号溝	Da1-5	163	22	3	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
13号溝	Da1-4・1-5・2-5	235	23	3	弧状	N-3°-W	なし	重複無し	V			
14号溝	Da1-4・2-4・2-5	254	28	4	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
15号溝	Da2-4・2-5	250	27	6	弧状	N-4°-E	土師器片	重複無し	V			
16号溝	Da2-4・3-4・3-5	267	30	6	弧状	N-3°-E	須恵器無台杯	重複無し	V			
17号溝	Da2-3・2-4・3-4	183	24	6	弧状	N-6°-E	なし	重複無し	V			
18号溝	Da3-3・3-4	159	26	3	弧状	N-9°-E	なし	重複無し	V			
19号溝	Da3-3・3-4・4-4	220	36	6	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			8
20号溝	Da3-3・4-3・4-4	180	24	3	弧状	N-0°	なし	重複無し	V			
21号溝	Ca2-5・3-4・3-5・4-3・ 2.Da1-2・1-3・2-2	(1443)	25	35	円形狀	N-89°-E	なし	< 11号坑.1・4・ 26号溝.1号不明. P19・26	V	12・ 13	13	6・7
22号溝	Fb3-1・3-2・4-1	344	32	6	弧状	N-85°-W	なし	重複無し	V	15		15
23号溝	Gb3-2・4-2	353	123	9	弧状	N-58°-W	なし	< 4号土坑	V	10・ 15		7
24号溝	Da5-3	(140)	24	4	弧状	N-9°-E	なし	重複無し	V			
25号溝	Da5-2・5-3	198	27	6	弧状	N-10°-E	なし	重複無し	V	16	16	
26号溝	Ca4-3・3-3.Da1-2・1-3	(657)	78	13	箱状	N-74°-E	須恵器無台杯(32)・甕・土師器無台杯(33・ 35)・小甕(36)・鏡・黑色土器無台杯(37)・円形土器製品(38)	< 1号不明. > 11号土坑. 21号溝.P19・26	V	13	13	6・7
27号溝	Da5-2・5-3	222	29	4	弧状	N-11°-E	土師器片	重複無し	V			
28号溝	Da4-3・4-4	(160)	28	2	弧状	N-0°	須恵器模瓶・土師器片	重複無し	V			8
29号溝	Da4-3	(180)	49	4	弧状	N-0°	須恵器無台杯・土師器片	重複無し	V			16
30号溝	Da5-1・5-2	(143)	30	2	弧状	N-9°-E	須恵器片・土師器片	重複無し	V			
31号溝	Ea1-1・1-2	(154)	27	3	弧状	N-9°-E	なし	重複無し	V			
32号溝	Ch3-1・3-2・4-2	256	27	4	弧状	N-3°-E	なし	重複無し	V			8

性格不明遺構

遺構名	グリッド	規模(cm)			断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出		写真 面版	
		長さ	幅	深さ					剖面	削位		
1号性格 不明遺構 2-2	Ca3-4・3-5・4-3・4-4・ 5-3.Cb1-1・1-2・2-1・ 2-3-1.Da1-2・1-3・ 2-2	(1454)	257	13	弧状	N-2°-W	須恵器無台杯(24・32・40～43)・有 台杯(44～49)・杯蓋(47～50)・長頸 瓶(51)・横瓶(52)・甕・土師器無台杯(53 ～56)・甕・鏡(57)・黑色土器無台杯	< 1・4号溝. > 11号 土坑.21・26号溝.P96～ 9・13・19・26	V	12・ 13・ 17	13・ 17	7～ 9

ピット

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)	底面 長軸 短軸 深さ	断面形	柱幅	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出 部位	埋 面	写真 面
P1	Da2-5	円形	21	20	11	17.91	平円状	なし	重複無し	V	
P2	Da3-4・3-5	円形	42	37	22	17.82	平円状	なし	重複無し	V	
P3	Cb4-1	円形	17	17	17	17.92	U字状	なし	< 7号溝	V	
P4	Fa3-4	楕円形	21	16	8	17.78	平円状	なし	重複無し	V	
P5	Fa5-3	円形	22	20	4	17.85	弧状	なし	重複無し	V	
P6	Ch2-2	円形	21	20	11	18.01	平円状	土師器片	< 1号不明	V	
P7	Ch2-2	円形	18	17	7	18.04	平円状	なし	< 1号不明	V	
P8	Ch2-2	円形	17	17	11	18.03	U字状	なし	< 1号不明	V	
P9	Ch3-1	円形	15	15	15	17.95	U字状	なし	< 1号不明	V	
P10	Ch3-2	円形	17	14	10	17.98	V字状	なし	重複無し	V	
P11	Ch2-3・3-3	円形	18	15	11	18.01	U字状	なし	重複無し	V	
P12	Ch3-3	円形	21	19	14	17.97	U字状	なし	重複無し	V	
P13	Ch1-1・1-2・ 2-1・2-2	楕円形	30	24	15	17.90	平円状	なし	重複無し	V	8
P14	Aa3-3	円形	18	14	13	17.77	V字状	なし	重複無し	V	
P15	Aa2-3	円形	19	17	7	17.88	平円状	なし	重複無し	V	
P16	Aa3-3	円形	20	16	14	17.82	U字状	なし	重複無し	V	
P17	Aa2-3	円形	23	20	12	17.84	平円状	なし	重複無し	V	
P18	Aa3-3	円形	19	18	12	17.83	U字状	なし	重複無し	V	
P19	Da1-2	円形	31	28	22	17.94	U字状	なし	重複無し	V	7
P20	Ca2-2	円形	57	56	12	18.02	平円状	なし	重複無し	V	
P24	Ea1-3	円形	30	28	12	17.90	平円状	なし	重複無し	V	
P25	Ea1-3	楕円形	31	24	6	17.95	弧状	なし	重複無し	V	
P26	Ga5-3	楕円形	50	37	24	17.78	U字状	なし	< 26号溝, > 21号溝	V	13
P27	Ea2-2	楕円形	37	29	13	17.94	平円状	なし	重複無し	V	6・ 7

杭

遺構名	グリッド	規模(cm)	底面高	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出 部位	埋 面	写真 面
杭列	Fb1-2		14	17.65		なし	重複無し	V	
	Fb1-1		10	17.72	N 82° E	なし	重複無し	V	
	Fb2-1		20	17.64		なし	重複無し	V	
	Fb2-1		10	17.76		なし	重複無し	V	
	Fb2-1		8	17.78		なし	重複無し	V	
	Fb2-1		3	17.86	N 65° E	なし	重複無し	V	
19 19 9									

表3 遺物観察表

- ・遺構の略称：上=土坑、遺集=遺物集中、不=性格不明遺構。
- ・計測値：()の数値は、残存値を示す。
- ・遺物度：口=口縁部、底=底部。
- ・成形、調整：ロクロ=ロクロナギ、ケズリ=回転ヘラケズリ
- ・ヘラ切り=回転ヘラ切り、糸切り=回転糸切り。
- ・重積き：分類は、(春日1989)に準じ、判別可能なものの記載。
- ・胎土の略称：石=石英、長=長石、黒雲=黒雲母、金雲=金雲母、白=白色粘土。

土器

開拓番号	遺構	グリッド	部位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度	成形・調整	焼成 窯焼き	色調	胎土	備考	埋 面	写真 面	
						口径	器高	底径									
1	75トレ			直底器	無口杯	B1	11.8	7.6	3.1	口22/36 底36/36	ロクロ(左), ヘラ切り	還元窯焼 C	Ng/ 灰白	粘土質 3mm以下 の粒・石質・微 小な空気隙	小泊類似		
2	81トレ			直底器	費				(6.4)	外: 磨子目タマ 内: 同心円当 て具眼	還元良好	Ng/ 灰白	粘土質 2mm以下 の粒少	断面粘土 精み上げ 有り			
3	75トレ			土師器	無口碗	A2	13.2	5.2	4.0	口5/36 底6/36	ロクロ・糸切り	陶化良好	10YR7/3 に5・4	精良、微小な空 気隙多	4		
4	81トレ			土師器	無口碗	A2	13.2	4.5	4.4	口8/36 底36/36	ロクロ(右), 斷 切り	陶化良好	7.5YR7/4 に5・4	精良、微小な空 気隙多	底面墨書き 〔下〕		
5	81トレ			土師器	無口碗	A1	17.4	6.2	5.2	口6/36 底21/36	ロクロ(右), 断 切り	陶化軟質	10YR8/3 淡黄	2mm以下の長・微 小な空気隙			12
6	81トレ			黑色土器	無口椀		13.6		3.3	口7/36	外: ロクロ・ケズ リ(下), 内: ロコ ロ	陶化良好	精良、微小な空 気隙多	内面「家 」と書か れ、口縁内 面に墨書き 有り			
10	I土・Ab5-3	I	黑色土器	無口碗	B1		13.7	4.8	5.3	口27/36 底36/36	外: ロクロ・ケズ リ, 内: ロコロ→ ミガキ	陶化軟質	2.5Y8/3 淡黄	3mm以下の長・石・ 微小な空気隙	口縁内部 に墨書き 有り		
11	8土・Ba1-5	I	直底器	無口杯	A1	12.1	3.4	6.9	口3/36 底8/36	ロクロ・ヘラ切り	還元良好	10Y7/t 灰白	粘土質 3mm以下 の石・1mm以下の 長微量	11			

土器

記載番号	遺構	グリッド	剖位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度	成形・調整	焼成重焼き	色調	胎土	備考	採集回数	写真回数
						口径	器高	底径								
12	8 土	Bb1-1	I	須恵器	無台杯 A2	13.2	3.6	6.8	口8/36 底10/36	ロクロ、ヘア切り	還元不良 灰白	2.5YR8/1 灰白	シルト質、2mm以下の長・石多量、微小な金雲微量			
13	8 土	Ba1-5	I	須恵器	無台杯 B1	12.8	3.3	8.0	口32/36 底26/36	ロクロ(左)、系切り	還元良好 C	10YR6/1 灰灰	シルト質、1mm以下の長少量	赤褐色小泊窓		
14	8 土	Ba1-5 Ba2-5 Bb1-1 Ab4-1 Bb1-1・1-2	I	須恵器	甌				口1/36	外:カキメ・平行タタキ・内:同心円当て具板	還元不良 灰黄	2.5Y7/3 灰黄	3mm以下の長・石多量、微小な金雲少量	牛焼け		11
15	8 土	Ba1-5	I	土師器	無台椀 I	13.4			口11/36	ロクロ	鰐化軟質	7.5YR7/6 灰	粘土質、5mm以下の長・2mm以下の長多量、微小な金雲多量			12
16	8 土	Ba1-5	I	土師器	無台椀 A2	14.4	3.3	5.8	口13/36 底18/36	ロクロ(右)、系切り	鰐化良好	10YR7/4 灰白	粘良、微小な金雲多量	底部墨書き「土」か		
17	11 土	Ca4-3	I	須恵器	短颈甌	9.2			口7/36	ロクロ	還元堅緻	5GYS/1 オリーブ灰	粘土質、2mm以下の長・3条の長多量、微小な自然釉、還元燒成			
18	1 潟	Cb1-1	2	須恵器	無台杯 A1?	13.1			口6/36	ロクロ	還元軟質	10Y7/1 灰白	シルト質、3mm以下の長・石少量、微小な金雲微量			
19	1 潟	Ca2-5	I	須恵器	有台杯 B1	10.5	4.2	5.5	口4/36 底14/36	ロクロ、ヘア切り	還元堅緻 C	N5/5 灰	粘土質、3mm以下の石・1mm以下の長多量			
20	2 潟	Bb4-1	I	須恵器	無台杯 A1?	12.0			口6/36	ロクロ	還元良好 C	7.5YT7/1 灰白	粘土質、3mm以下の長・石・石量			
21	2 潟	Bb4-1 3 潟	Ba3-5	I	土師器	甌			外:カキメ・平行タタキ・内:円形押注(当て具)	鰐化良好	2.5Y7/2 灰黄	3mm以下の長・石・石量				
22	3 潟	Ba3-5	I	須恵器	無台杯 A1?	12.2			口4/36	ロクロ	還元良好	10YR8/1 灰白	シルト質、2mm以下の長・石少量			
23	4 潟	Ca3-4	I	須恵器	無台杯 A				6.6 或12/36	ロクロ、ヘア切り→ナデ	還元良好	2.5Y7/1 灰白	粘土質、2mm以下の長少量、微小な金雲微量			
24	4 潟	Cb2-1 1 不	I	須恵器	無台杯 A1	12.4	3.4	6.4	13/36 底14/36	ロクロ、ヘア切り→ナデ	還元良好 C	N5/7 灰	粘土質、3mm以下の長多量、2mm以下の石少量			
25	4 潟	Ca3-4	I	須恵器	有台杯 A	11.5			口5/36	ロクロ	還元軟質	5Y7/1 灰白	粘土質、1mm以下の長の長多量			
26	4 潟	Ca3-4 1 不	I	須恵器	有台杯 B1				4.6 底19/36	ロクロ、ヘア切り	還元堅緻 Cか	2.5GYS/1 オリーブ灰	粘土質、1mm以下の長・石量			
27	4 潟	Cb2-1	I	須恵器	甌・瓶				ロクロ	還元堅緻	N5/5 灰	粘土質、2mm以下の長・石量、微小な金雲微量	底部外側面墨書き		13	
28	4 潟	Ca3-2	I	土師器	無台椀				4.8 底20/36	ロクロ(右)、系切り	鰐化軟質	10YR8/4 淡黄褐	1mm以下の石・微小な金雲少量			
29	4 潟	Ca3-3 Ca4-4	I	土師器	無台椀				5.4 底25/36	ロクロ(右)、系切り	鰐化軟質	5YR8/4 内・ナデ	5mm以下の石・微小な金雲少量			
30	4 潟	Ca3-2	I	黒色土器	有台瓶	12.6	(1.6)	(7.2)	口3/36	外:ミガキ・ケズリ・内:ミガキ	鰐化良好	10YR2/1 黑	粘良、微小な石・内外面墨書き少量			
32	26 潟	Ca5-3 1 不	I	須恵器	無台杯 A2	12.9	3.3	9.8	口11/36 底3/36	ロクロ、ヘア切り	還元半且 C	10Y5/1 灰	3mm以下の砂・長石・微小な金雲多量	口縁部外側面墨書き 内部使用による擦れ		
33	26 潟	Ca4-3	I	土師器	無台椀 B2	11.9	4.0	4.5	口8/36 底20/36	ロクロ、系切りか	鰐化不善	7.5YR7/6 灰	5mm以下の石・1mm以下の石・金雲少量			
34	26 潟	Ca4-3	I	土師器	無台椀	12.9			口4/36	ロクロ	鰐化良好	7.5YR7/6 灰	1mm以下の長多量、微小な金雲多量			
35	26 潟	Ca4-2・4-3	I	土師器	無台椀				5.0 底21/36	ロクロ(右)、系切り	鰐化不良	7.5YR8/4 淡黄褐	1mm以下の長・石・金雲微量			
36	26 潟	Ca4-3	I	土師器	小甌				7.0 底7/36	外:手持ちヘラゲズリ・内:ナデ	鰐化軟質	10YR7/3 内・ナデ・黄褐	3mm以下の砂多量、2mm以下の長・石・右少量			
37	26 潟	Ca4-3	I	黒色土器	無台椀 A1	14.1	4.6	5.2	口12/36 底29/36	ロクロ・ケズリ・内:ロクロ→ミガキ	鰐化良好	10YR8/3 淡黄褐	粘良、微小な長・石・金雲少量			
38	26 潟	Ca4-3	I	土師器	円筒形土製品				(16.2)	底4/36	ロクロ	鰐化良好	10YR7/4 内・ナデ・黄褐	3mm以下の砂・長石・墨多量		
40	1 不	Ca5-3	2	須恵器	無台杯 A2	12.8	(3.6)	7.0	口13/36 底8/36	ロクロ、ヘア切りか	還元軟質 C	10YK7/1 灰白	シルト質、砂少量、3mm以下の石・白多量			
41	1 不	Ca4-3 Ca5-2	2	須恵器	無台杯 A2	12.4	3.1	7.2	口14/36 底13/36	ロクロ(左)、系切り	還元良好	10YR7/1 灰白	粘土質、粗目・5mm以下の石・微小な金雲少量			18
42	1 不	Ch2-1 Ch3-1	2	壺瓦	無台杯 A				6.4 底20/36	ロクロ(右)、ヘア切り	還元良好	7.5Y7/1 灰白	粘土質、2mm以下の砂・長少量			

土器

測定番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度	成形・調整	焼成重焼き	色調	胎土	備考	辨別		
						CH	器高	底径									
43	I 不	Ch2-1	2	須恵器	無台杯	B2	12.1	2.7	7.5	口6/36 底6/36	ロクロ(左),△ ラ切り	還元堅焼 C	10YR5/1 褐灰色	粘土質, 粘性, 3 mm以上の長・石・ 金雲少量	佐渡小泊 原		
44	I 不	Ca2-5	2	須恵器	有台杯	A1	11.8	3.5	6.0	口4/36 底4/36	ロクロ, ヘラ切り	還元良好 C	N6/ 灰	粘土質, 5mm以下 の石・1mm以下の 長・金雲少量			
45	I 不	Ca5-3	2	須恵器	有台杯	A1	12.2	3.9	7.4	口27/36 底完存	ロクロ	還元良好	N6/ 灰	シルト質, 3mm以 下の長・石・微 小な金雲少量			
46	I 不	Ca5-3	2	須恵器	有台杯	B1	9.9			口4/36	ロクロ	還元堅燒 Cか	N3/ 暗灰	粘土質, 3mm以 下の長・石・少量			
47	I 不	Ca5-3	2	須恵器	杯蓋 A		13.5	2.7	2.6	口26/36 底み完存	ロクロ, ヘラ切り +ナデ	還元良好	5Y7/1 灰白	粘土質, 3mm以 下の長・石・少量	内面墨痕		
48	I 不	Ca5-3	2	須恵器	杯蓋 B		13.4	2.3	2.4	口15/36	ロクロ	還元良好	2.5GY6/1 オリーブ灰	粘土質, 粘性, 3 mm以上の長・微 小な金雲少量			
49	I 不	Ca3-4	2	須恵器	杯蓋 B		14.0	2.3	2.6	口3/36	ロクロ	還元良好 B2か	N5/ 灰	粘土質, 3mm以 下の石・石多量, 微 小な金雲少量	内面墨痕		
50	I 不	Ca4-4	2	須恵器	杯蓋					ロクロ	還元堅燒	N4/ 灰	粘土質, 3mm以 下の石・石多量, 微 小な金雲少量	縫合欠損			
51	I 不	Ch2-1 Ch2-2 Cb5-3	1 II III	須恵器	長颈瓶		9.2			口1/36	ロクロ	還元堅燒	5Y6/1	粘土質, 3mm以 下の石・石多量, 微 小な金雲少量	口縁部内 面・肩部外 面自然崩		
52	I 不	Ca2-5	2	須恵器	横瓶					外:カキメ, 内: 当て具組	還元良好	N6/ 灰	粘土質, 3mm以 下の石・石多量, 微 小な金雲少量	閉塞部分			
53	I 不	Ch2-1	2 III	土師器	無台板	A1	12.9	3.7	5.5	口6/36 底17/36	ロクロ(右), 斜 切り	陶化良好 C	10YR8/3 浅黄褐	微小な金雲量			
54	I 不	Ch2-1	2	土師器	無台板	B2	11.8	3.9	4.8	口6/36 底17/36	ロクロ(右), △ ラ切り	陶化良好 C	10YR8/3 浅黄褐	微小な長・金雲 微量			
55	I 不	Ch2-1	2	土師器	無台板				底12/36	ロクロ, 系切り	陶化不良 C	2.5Y8/3 黄褐	2mm以下の石・微 小な金雲量				
56	I 不	Ch2-1 Ch2-2	2 III	土師器	無台板	C1	15.3	5.3	5.7	口7/36 底17/36	外:ロクロ+△ カキゼリ(下平), 内:ロクロ+△ カキゼリ(上平)	陶化良好 C	5YR4/6 暗灰	精良, 2mm以下の 長・金雲微量			
57	I 不	Ch2-1	2	土師器	罐	(31A)				口2/36	外:カキメナデ 内:ロクロ+ナデ	陶化良好 C	10YR7/3 にぶい黄褐	2mm以下の長・石・ 微小な金雲量			
62	遺集	Fa2-5	IV	須恵器	無台杯	A			6.8	底8/36	ロクロ, ヘラ切り	還元良好 B2	5BG-1	粘土質, 微小な長 少量	近底外面 里書		
63	遺集	Fa2-5	IV	須恵器	無台杯				8.5	底完存	ロクロ(右), △ ラ切り	還元不良 B2	10Y8/1	シルト質, 2mm以 下の長・石・少量			
64	遺集	Fa2-4	IV	須恵器	有台杯	B2	(3.2)	6.0	底16/36	ロクロ, ヘラ切り +ナデ	還元堅燒 Cか	N3/ 暗灰	粘土質, 1mm以 下の石・微小な石・ 白色量	近底墨痕			
65	遺集	Fa2-5	IV	須恵器	横瓶					外:平行タキ. 内:同心円切端 具組	還元良好	N6/ 灰	粘土質, 1mm以 下の石・金雲微量	内面擦れ、 黒斑・板 用刷			
66	遺集	Fa1-5 + 2-5. Fb1-1	IV	土師器	無台板	A1	13.6	3.6	5.2	完形	ロクロ(右), 斜 切り	陶化軟質 C	7.5YR7/4 にぶい相	微小な長・石・ 少量金雲	底部墨書 「仁」か		
67	遺集	Fa1-5	IV	土師器	無台板	B1	13.8	3.8	5.2	口12/36 底21/36	ロクロ(右), △ ラ切り	陶化軟質 C	10YR7/4 にぶい黄褐	微小な金雲多量	底部墨書 「十」、 前面も埋?		
68	遺集	Fa1-5 + 2-5.	IV	土師器	無台板	B1	12.7	4.4	4.8	口30/36 底完存	ロクロ(右), 斜 切り	陶化軟質 C	10YR7/4	3mm以下の石・微 小な金雲少量			
69	遺集	Fa1-5 + 2-5.	IV	土師器	無台板	C2	15.6	5.3	6.2	口4/36 底8/36	外:ロクロ+ケズ リ(下平), 内: △ガキ, 網, ケズ リミガキ, 網, ケズ リミガキ	陶化良好 C	10YR7/4 にぶい黄褐	精良, 3mm以 下の石・微小な金雲・ 黒雲微量	内側面丁 寧なミガキ		
70	遺集	Fa2-5	IV	土師器	無台板	I	15.3			口2/36	ロクロ	陶化良好 C	10YR7/3 にぶい黄褐	精良, 微小な金雲 多量			
71	遺集	Fa1-5	IV	土師器	無台板				4.9	底完存	ロクロ(右), 斜 切り	陶化軟質 C	10YR8/3 浅黄褐	微小な長・金雲 微量	底面墨書 「十」		
72	遺集	Fa1-5	IV	土師器	小甕					ロクロ	陶化良好 C	2.5Y6/2 黄灰	5mm以下の石少 量, 3mm以下の長・ 1mm以下の金雲・ 黒雲微量				
73	遺集	Fa1-5	IV	土師器	甕					外:平行タキ. 内:当て具組+ハ ケメ	陶化良好 C	5Y2/1 黒	2mm以下の長・石・ 微小な金雲量				
74	遺集	Fa1-5 + 2-5. Fb1-1	IV	黒色土器	無台板	A1	16.0	5.4	6	口20/36 底17/36	外:ロクロ+ケズ リ(下平), 内: △ガキ, 網, ケズ リミガキ	陶化良好 C	10YR7/4 にぶい黄褐	精良, 順滑な金 雲・黒雲微量	丁寧なミ ガキ, 内面 擦れによ る擦れ		
75	遺集	Fa2-4	IV	黒色土器	無台板	A1	16.0	5.4	5.8	口2/36 底31/36	外:ロクロ+ケズ リ(下平), 内: △ガキ	陶化良好 C	2.5Y7/3 浅黄褐	精良, 2mm以下の 石・黒雲微量, 微 小な金雲少量			

土器

記載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度	成形・調整	焼成・焼き	色調	胎土	備考	隣接	写真	
						口径	高さ	底径									
76	遺集	Fa2-5	IV	黒色土器	無台輪	B1	16.3	5.7	5.3	口1/36 底定存	外:ロクローケズリ(下平)、内:ロクローミガキ	焼成良好	2.5Y7/2 灰黄	焼良、微小な金雲・黒雲少量	丁寧なミガキ		
77	遺集	Fa2-5	IV	黒色土器	無台輪				口10/36	外:ロクローケズリ(下平)、内:ロクローミガキ	焼成良好	10YR6/3 にふく黄褐	焼良、微小な金雲・黒雲少量	丁寧なミガキ、内面使用による擦れ	21		
78	遺集	Fa1-5	IV	黒色土器	無台輪				口3/36	ロクローミガキ	焼成良好	10YR6/3 にふく黄褐	焼良、微小な金雲・黒雲少量	外面丁寧なミガキ		16	
80		Cb4-2	III	須恵器	無台杯	A2	12.6	3.5	7.0	口8/36 底13/36	ロクロ、ヘラ切り	還元良好	10Y6/1 灰	粘土質、3mm以下の長・石・微小な金雲少量			
81		Cb4-2	II	須恵器	無台杯	A2	12.2	3.3	7.6	口8/36 底6/36	ロクロ、ヘラ切り	還元堅韌	N4/ 灰	粘土質、2mm以下の石少量、1mm以下の長・黒雲微細			
82		Cb4-2	III	須恵器	無台杯	B2	12.4	2.9	9.0	口17/36	ロクロ(右)、ヘラ切り	還元良好	10YR7/1 灰白	粘土質、5mm以下の長・石少量			
83		Cb4-2	III	須恵器	有台杯	I			6.4	底6/36	ロクロ、ヘラ切り	還元堅韌	2.5Y6/2 灰黄	シルト質、2mm以下の長・石少量	金属器模倣		
84		Gb1-2	III	須恵器	有台杯	I			6.0	底10/36	系切り	還元堅韌	5B4/1 暗青灰	粘土質、2mm以下の長・石少量			
85		Fa5-3	III	須恵器	有台杯	B	15.8			口5/36	ロクロ	還元堅韌	N6/ 灰	粘土質、3mm以下の長・石少量	内面自然釉		
86		Fa2-5	III	須恵器	杯蓋	B			2.1		ロクロ、ヘラ切り	還元堅韌	5B5/1 青灰	シルト質、1mm以下の長・微小な金雲微細			
87		Ga1-4 Ga2-5	II	須恵器	長颈瓶		6.6			口1/36	ロクロ	還元良好	N3/ 灰	粘土質、1mm以下の長微細	肩部外側自然釉、底酒窓少泊裏		
88		Fa2-2	III	須恵器	長颈瓶					ロクロ	還元堅韌	N3/ 暗灰	粘土質、焼良、1mm以下の石少量	底邊小泊裏			
89		Ca4-5	III	須恵器	横瓶		13.5			口2/36	ロクロ	還元堅韌	N4/ 灰	粘土質、2mm以下の長・微小な金雲少量			17
90		Ca4-4	V上面	須恵器	横瓶					外:カキメ、平行タキメ、内:同心タキメ、円当て具痕	還元良好	N3/ 暗灰	粘土質、3mm以下の石・2mm以下の石少量	外面部自然釉			
91		Da1-5	III	須恵器	甕		21.2			口3/36	ロクロ	還元良好	N7/ 灰	粘土質、2mm以下の長・石少量	内面自然釉		
92			表揮	須恵器	甕					外:平行タキメ、内:同心円当て具痕	還元良好	5Y8/1 灰白	粘土質、1mm以下の長・金雲微細	外面部剥れ、転用砥石			
93		Da1-2	V上面	須恵器	甕						還元良好	10YR7/1 灰白	粘土質、3mm以下の長・微小な金雲少量	外面部剥れ、内面自然釉、焼き歪み、転用砥石			
94		Ca4-5	V上面	土師器	無台輪			5.0	底30/36	ロクロ、系切り	焼成軟質	7.5YR8/6 浅黄褐	7mm以下の石・1mm以下の石・微小な金雲微細				
95		Ca3-4	V上面	土師器	小甕		13.5			口4/36	外:ロクロ・カキメ、内:ロクロ	焼成軟質	10YR7/3 にふく黄褐	5mm以下の長微細、2mm以下の石・金雲少量			
96		Ca4-4	V上面	土師器	長甕	(18.1)			口1/36	外:カキメ内:ナデ	焼成良好	2.5Y6/4 にふく黄	3mm以下の長・石・1mm以下の金雲・黒雲少量				
97		Da1-2	滑乱	土師器	長甕	(19.8)			口3/36	外:ロクロ・カキメ、内:ロクロ・ナデ	焼成良好	10YR8/4 浅黄褐	2mm以下の長・石多量				
98		Fa2-2+ 2-5	III	黒色土器	無台輪			6.0	底8/36	外:ロクロ・カキメ(下平)、内:ミガキ	焼成良好	2.5Y8/3 浅黄褐	焼良、微小な金雲微細				
99		Ea3-5	V上面	黒色土器	有台輪	(14.0)		(3.5)	口2/36	外:ミガキ・カキメ(下平)、内:ミガキ	焼成良好	10YR2/1 黑	焼良、1mm以下の長微細	内面丁寧なミガキ		18	
100		Ca3-2	滑乱	黒色土器	有台輪	12.5			口6/36	ロクロ・ミガキ	焼成良好	N3/ 暗灰	1mm以下の長・微小な金雲微細	内面黒色處理			

石製品

記載番号	遺構	グリッド	層位	器種	用途	計測値(cm)			重量(g)	依存度	石材	加工・使用状況	備考	隣接	写真
						長さ	幅	厚さ							
31	4溝	Ca2-5	I	礫?		(7.3)	6.2	5.3	247.6	1/2	砂岩	被熱			14
39	1溝	Da5-5	I	砾石		15.5	6.1	4.6	720.2	完存	閃緑岩	全面に使用痕			16
79	遺集	Fa2-5	IV	研磨貝か	研磨貝か	16.7	7.3	6.8	1290.5	完存	安山岩?花崗岩?	全面に擦れ			21
101		Ob2-2	III	砾石	中研丸	(7.7)	(3.1)	3.0	116.1	1/2	凝灰岩	2面に擦れ			23

木製品

周報 番号	遺構 番号	グリッド	部位	種別	測線	計測値 (cm)			進行度	木取り	崩壊	加工・技法・支撑	備考	排 開 写真 回数
						長さ	幅	厚さ						
58	机 1	Fb2-1	IV	木製品	板	13.7	4.1		打ち込み部残存	丸木取り	ヤナギ属	一方向から加工		
59	机 2	Fb1-1	IV	木製品	板	12.5	3.3		打ち込み部残存	丸木取り	ヤナギ属か	一方向から加工		20 18
60	机 3	Fb2-1	IV	木製品	板	23.2	3.8		打ち込み部残存	丸木取り	ヤナギ属	一方向から加工		
61	机 4	Fb2-1	IV	木製品	机	14.3	3.3		打ち込み部残存	丸木取り	ヤナギ属	一方向から加工		

第IV章 菅田遺跡（1区）の遺構と遺物

1 グリッド設定と基本土層

調査区とグリッドの設定（第24図）

菅田遺跡の調査に際し、調査範囲全体にかかるグリッドを設定し、遺構・出土遺物の位置確認に利用した。

グリッドの設定は「第3章」に記述したとおりである。起点となる「Bo1-1」はX=216519.076、Y=77659.665である。調査に使用したグリッドは「Bo1-1」と「Go1-1」を結ぶ軸線で、真北方向に対し西に55° 46' 19"傾いている。測量基準座標値と標高値は二級水準点A-16・A-30（H=16.487）と四级水準点ST 1・ST 2（H=15.262）を視準し、調査区周辺に仮杭を打設し計測している。

基本土層（第24・25図）

調査前の地表高は15.3m前後で、東から西へごく緩やかに傾斜する。基本土層は、調査区外周の任意の5地点で観察・記録した。本調査区は、後世の水田耕作に伴う土地変更などにより削平されており、遺物包含層と、その下位の土層も、影響を受けている可能性がある高い。このため、基本的には表土直下が遺構確認面となる範囲が大部分を占める。

基本土層は、堆積状況に応じ、上位からI～V層に大別した。以下に、各層の概要を記す。

I層…水田耕作土。暗褐色シルト。古代～現代の遺物が出土する。

II層…旧水田耕作土。黒色シルト。古代～近世の遺物が出土する。

III層…上面が遺構確認面。灰色粗砂。流路の痕跡と考えられる（旧路路）。調査区の広範囲にみられ、Ep・Fo・Fpグリッドで東へ緩やかに傾斜する。なお、その上には「湿地」とみられる粘土・シルト・砂の互層堆積が広がる。湿地については後述する。

IV層…灰オリーブ色シルト。Bp・Cpグリッドのごく狭い範囲にみられる土層である。

V層…灰オリーブ色シルト。Bo・Bp・Cpグリッドの狭い範囲にみられる土層で、地点により、砂質が強い。

VI層…灰オリーブ色粘土。Bo・Bp・Cpグリッドの狭い範囲にみられる土層である。

2 遺構・遺物の概要

遺構の遺存状態は不良であり、五斗遺跡と同様に、遺構底面付近のみ遺存していた可能性が高い。検出した遺構は、土坑2期、ピット6基である。遺構埋土は、いずれも黒色や暗褐色を基調とし、III層（粗砂）上で検出した。ピットはCp・Dpグリッドに集中していたが、建物を構成するような配置は見いだせなかった。

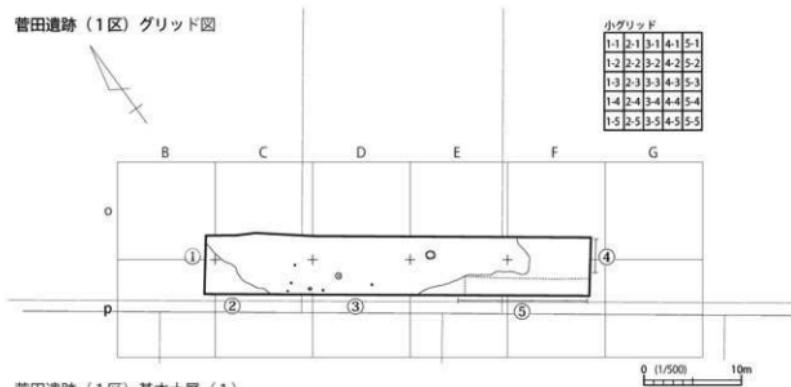
遺物の出土量はコンテナ1箱である。遺物は、漁澤編年IV期（春日編年IV期並行）に位置付けられ、8世紀中葉頃にあたる。

3 遺構と遺物各説

1号土坑（第27図）

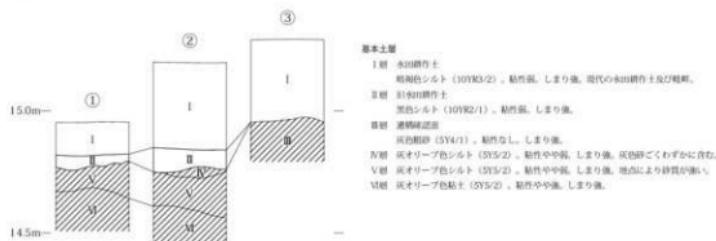
Eoグリッドに位置する。断面形が弧状で浅い。出土遺物はない。

菅田遺跡（1区）グリッド図

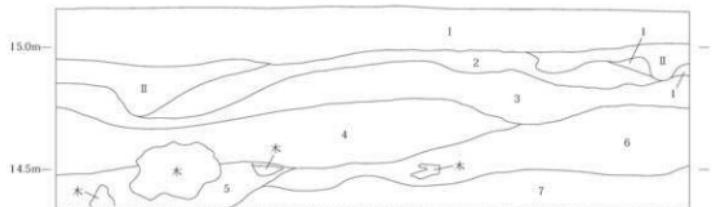


菅田遺跡（1区）基本土層（1）

15.5m—

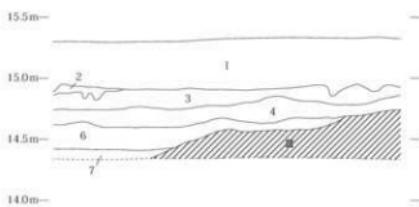
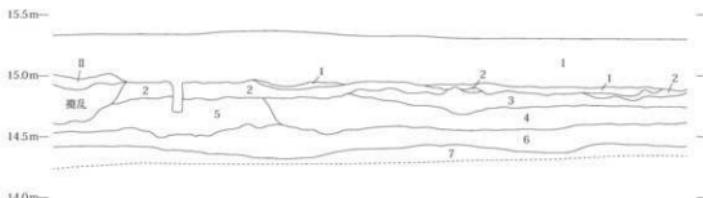
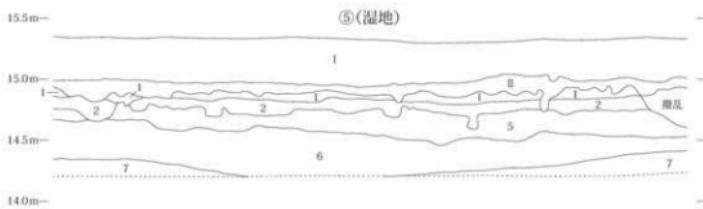


④(湿地)



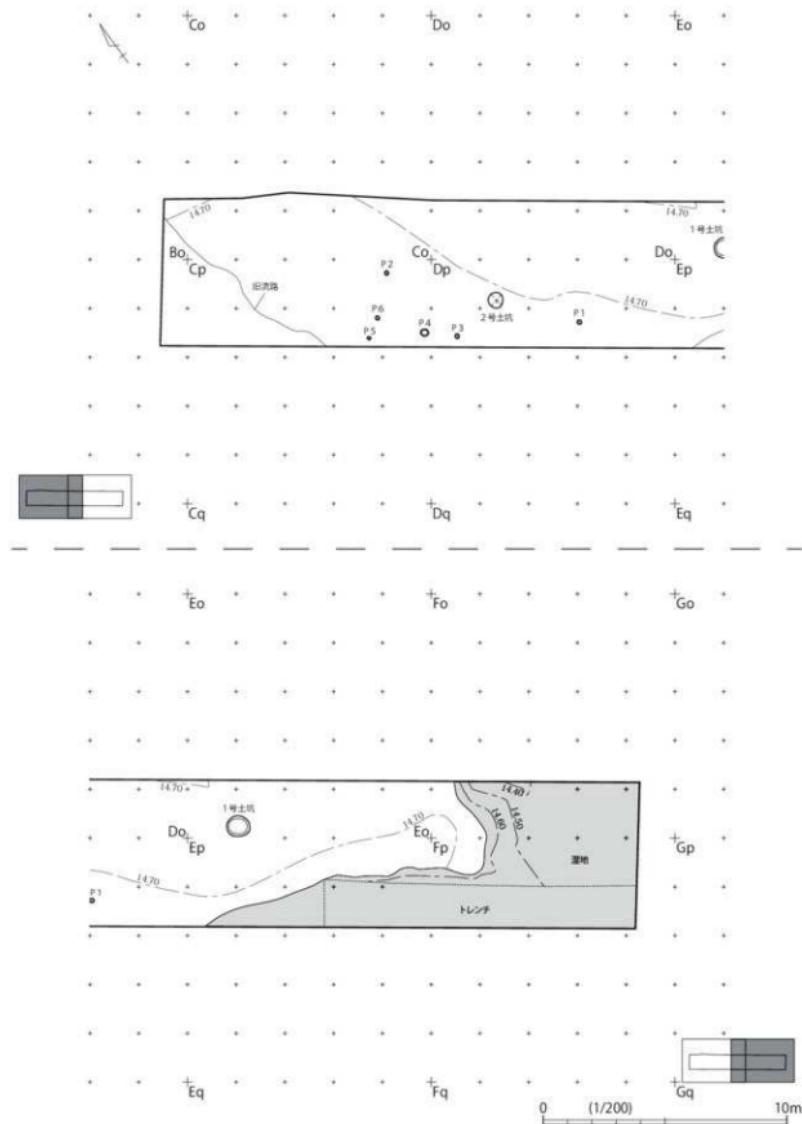
第24図 菅田遺跡（1区）グリッド図、基本土層（1）

营田遺跡（1区）基本土層（2）



第25図 首田遺跡(1区) 基本土層(2)





第26図 普田遺跡（1区）遺構配置図

2号土坑（第27図）

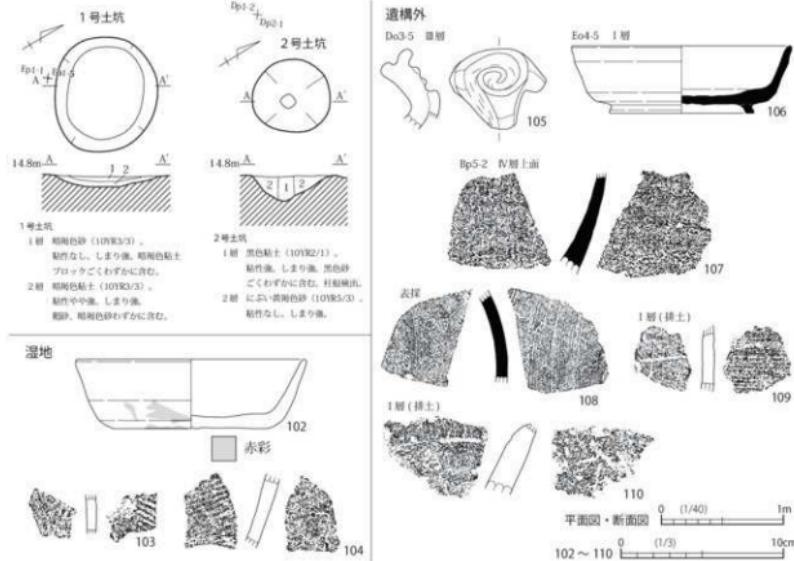
Dpグリッドに位置する。平面規模から土坑としたが、1層が柱痕状に堆積することから柱穴の可能性もある。1層から木片（第V章材6）を検出したが、分析によると、樹種はバラ科、較正年代は8世紀前半である。自然科学分析の見地から「埋没の際に混入した木材」の可能性もあると判断された（第V章参照）。その他の出土遺物はない。

湿地（第24～26図）

Ep・Fo・Fpグリッドに位置する。調査区全面の掘削に先行して、層序観察と排水溝を兼ねた幅2.5mのトレーニングを設定し、層序を確認した後、層位順に掘削した。東へ緩やかに傾斜するⅢ層上に、粘土・シルト・砂の互層が連続する。7層に分層でき、いずれの層も多量の未分解植物遺存体を含んでいる。時間をかけて堆積した水成堆積層と考えられる。径20cm超の自然木も出土しているが、木製品はない。出土遺物が少ないと著しい湧水で壁面が崩落する可能性もあったため、7層までの掘削に留めた。遺物は4層から、土師器無台杯（102）・長甕（103）・鍋（104）が出土している。102は焼成状態から土師器とした。外面に赤彩が認められる。赤彩土師器は県内での出土例は少ない。笹澤編年IV期（春日編年IV1期並行）に位置付けられる。103は体部片である。104は体部片で、外側面とも摩耗が著しい。

遺構外出土の遺物（第27図）

105は縄文土器の深鉢口縁部の突起である。渦巻文が施される。縄文時代中期の大木8b式に比定できる。106は須恵器有台杯で、A1類である。笹澤編年IV期（春日編年IV1期並行）に位置付けられる。107は須恵器長頸瓶の底部付近と判断したが、身が深い椀の可能性もある。108は須恵器横瓶の閉塞部分である。109は土師器長甕の体部片と考えられる。110は越前焼捕鉢で口縁端部は欠損する。中世の所産である。



第27図 1・2号土坑、湿地、遺構外出土遺物

表4 遺構一覧表

土坑

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)			底面標高 (m)	断面形	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出 層位	種別		
			長軸	短軸	深さ						平面	断面	
1号土坑	Eo1-5・2-5	円形	94	85	9	14.62	弧状	なし	重複無し	IV	27	27	II
2号土坑	Dp2-1	円形	63	60	20	14.50	半円状	木片	重複無し	IV			

ピット

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)			底面 標高 深さ	断面形	柱軸	出土遺物	重複遺構・新旧関係	検出層位	種別	
			長軸	短軸	深さ							平面	断面
P1	Dp3-2・4-2	円形	19	17	6	14.61	半円状	なし	なし	重複無し	IV		
P2	Cp5-1	円形	19	17	8	14.67	半円状	なし	なし	重複無し	IV		
P3	Dp1-2	円形	19	17	4	14.71	弧状	なし	なし	重複無し	IV		
P4	Cp5-2	楕円形	34	28	20	14.54	半円状	なし	なし	重複無し	IV		
P5	Cp4-2	円形	15	13	6	14.71	半円状	なし	なし	重複無し	IV		
P6	Cp4-2	円形	18	16	10	14.66	半円状	なし	なし	重複無し	IV		

表5 遺物観察表

開拓番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)			遺存度	成形・調整	焼成・重焼き	色調	胎土	備考	補助	写真
						口径	高さ	底径								
7	98トレ		須恵器	無台杯	A2?	13.4	(2.9)	口3/36	ロクロ	温元軟質	2.5Y7/2 灰質	シルト質、1mm以上の長・微少な 金芸多量				
8	98トレ		須恵器	甕			(14.2)		外:ハケ・平行タ キ内:同心 四?当て頭部	温元良好	2.5Y7/1 灰白	粘土質、5mm以下の 粒多量、微小な 金芸少量	粘土質、5mm以下の 粒多量、微小な 金芸少量	内面下部 に自然軸、 陶片織着		5
9	98トレ		土師器	甕			(8.4)		カキメ	陶化良好	10YR6/3 に赤い骨粒	3mm以下の長・石・ 粘土質、微少な金芸多量	粘土質、3mm以下の長・石・ 粘土質、微少な金芸多量	外道スズ 付着		
102	湿地	Ep4-2	4	土師器	無台杯	14.0	4.2	9.8	口4/36 底17/36	ロクロ、ヘラ切り	陶化良好	10YR7/4 に赤い骨粒	5mm以下の長・1 mm以下の石・石 灰質	外赤 彩、8世紀 第3四半紀		
103	湿地	Fp3-1	4	土師器	無台杯					外:平行タキ 内:カキメ	陶化良好	5Y5/1 灰灰	砂粒、2mm以下の 粒多量、微少な 金芸微量			
104	湿地	Ep4-2	4	土師器	甕					内:カキメ	陶化軟質	10YR8/3 浅鉢形	砂粒、少量、2mm以 上の長・石多量	内外面厚 耗		19
105	Do3-5	III	織文土器	深鉢							良好	10YR4/2 灰灰	砂粒、1mm以下の 粒多量	大穴 b 底、2mm 以上		
106	Eo4-5	I	須恵器	有台杯	A1	13.4	4.1	8.9	口15/36 底18/36	ロクロ、ヘラ切り	温元良好	2.5G7/1 明オリーブ灰	粘土質、3mm以下の 粒・石微量	粘土質、3mm以下の 粒・石微量		
107	Bp5-2	I上面	須恵器	長頸瓶						ロクロ	温元堅頑	N5/ 灰	粘土質、2mm以下の 粒・石・1mm以下の 長・微少な金芸 微量	粘土質、2mm以下の 粒・石・1mm以下の 長・微少な金芸 微量		27
108		表探	須恵器	縹瓶					外:カキメ、内: ロクロ	温元良好	2.5Y6/1 黄灰	粘土質、5mm以下の 粒・石・2mm以下の 長・微少な金芸 微量	粘土質、5mm以下の 粒・石・2mm以下の 長・微少な金芸 微量	閉塞部分		
109		I (耕土)	土師器	長甕					外:カキメ、内: ナフ	陶化良好	10YR5/2 灰灰	2mm以下の長・石・ 粘土質、微少な金芸 微量	2mm以下の長・石・ 粘土質、微少な金芸 微量			
110		I (耕土)	越前鏡	縹跡					ロクロ	陶化良好	10YR6/6 明黄灰	6mm以下の長・少 量	口跡部内 面に沈殿 1条、中世			

第V章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

五斗遺跡・菅田遺跡は新潟県新発田市下三光・東姫田に所在する。

本分析調査では遺構から出土した木材の年代測定および樹種同定を行い、遺跡の年代観と木材利用に関する情報を得る。

1 試 料

年代測定ならびに樹種同定用試料は、表6に示す11点である。このうち、五斗遺跡が10点、菅田遺跡が1点である。分析試料の詳細な結果と合わせて表に示す。

2 分析方法

(1) 樹種同定

生材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(2) 放射性炭素年代測定

土壤等、試料の周りの付着物を除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、14C濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)である。

表6 樹種同定・放射性炭素年代測定結果

試料名	樹種	方法	補正年代 (齢年校正用) BP (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	齢年校正年代						Code No.
					年代値				確率%		
杭1 (SB)	ヤナギ属	AAA (IM)	1005 ± 20 (1003 ± 20)	-26.44 ± 0.43	σ	cal AD 997 - cal AD 1005	953 -	945	cal BP	9.2	YU- 10907 pal- 12477
					cal AD 1011 - cal AD 1034	959 -	917	cal BP	59.0		
					2 σ	cal AD 1102 - cal AD 1119	848 -	831	cal BP	4.2	
					cal AD 1030 - cal AD 1048	921 -	901	cal BP	18.5		
杭3 (60)	ヤナギ属	AAA (IM)	950 ± 20 (951 ± 20)	-30.45 ± 0.29	σ	cal AD 1086 - cal AD 1124	885 -	877	cal BP	38.4	YU- 10908 pal- 12478
					cal AD 1138 - cal AD 1150	813 -	801	cal BP	11.3		
					2 σ	cal AD 1024 - cal AD 1059	927 -	891	cal BP	26.4	
					cal AD 1065 - cal AD 1155	885 -	796	cal BP	69.0		
杭4 (61)	ヤナギ属	AAA (IM)	940 ± 20 (942 ± 20)	-28.88 ± 0.25	σ	cal AD 1035 - cal AD 1050	915 -	901	cal BP	13.5	YU- 10909 pal- 12479
					cal AD 1083 - cal AD 1125	867 -	825	cal BP	40.9		
					cal AD 1136 - cal AD 1151	814 -	800	cal BP	13.8		
					2 σ	cal AD 1029 - cal AD 1154	921 -	796	cal BP	95.4	
杭5	ヤナギ属	AAA (IM)	955 ± 20 (957 ± 20)	-27.56 ± 0.53	σ	cal AD 1028 - cal AD 1046	922 -	904	cal BP	23.0	YU- 10910 pal- 12480
					cal AD 1091 - cal AD 1121	859 -	829	cal BP	36.5		
					cal AD 1140 - cal AD 1148	811 -	801	cal BP	8.7		
					2 σ	cal AD 1021 - cal AD 1058	929 -	893	cal BP	30.5	
杭6	ヤナギ属	AAA (IM)	1000 ± 20 (1000 ± 20)	-29.52 ± 0.32	σ	cal AD 998 - cal AD 1004	952 -	947	cal BP	5.4	YU- 10911 pal- 12481
					cal AD 1012 - cal AD 1035	939 -	915	cal BP	62.8		
					2 σ	cal AD 1097 - cal AD 1120	854 -	830	cal BP	6.6	
					cal AD 1143 - cal AD 1147	868 -	804	cal BP	0.7		
材1 (Bal-3 V)	スキ	AAA (IM)	115 ± 20 (115 ± 20)	-23.80 ± 0.26	σ	cal AD 1691 - cal AD 1708	259 -	242	cal BP	10.5	YU- 10912 pal- 12482
					cal AD 1718 - cal AD 1728	232 -	223	cal BP	6.0		
					cal AD 1811 - cal AD 1827	139 -	121	cal BP	9.3		
					cal AD 1832 - cal AD 1888	118 -	63	cal BP	36.1		
材2 (Ob-4-I III)	スキ	AAA (IM)	95 ± 20 (94 ± 20)	-25.08 ± 0.28	σ	cal AD 1911 - cal AD 1922	39 -	28	cal BP	6.3	YU- 10913 pal- 12483
					2 σ	cal AD 1682 - cal AD 1736	268 -	215	cal BP	27.9	
					cal AD 1805 - cal AD 1895	145 -	55	cal BP	54.6		
					cal AD 1903 - cal AD 1932	48 -	19	cal BP	12.9		
材3 (Ob-4-II III)	スキ	AAA (IM)	90 ± 20 (88 ± 20)	-23.15 ± 0.30	σ	cal AD 1697 - cal AD 1725	253 -	225	cal BP	23.3	YU- 10914 pal- 12484
					cal AD 1815 - cal AD 1835	136 -	115	cal BP	16.7		
					cal AD 1877 - cal AD 1897	73 -	53	cal BP	16.1		
					2 σ	cal AD 1902 - cal AD 1917	48 -	33	cal BP	12.1	
材4 (Ob-4-III)	スキ	AAA (IM)	145 ± 20 (147 ± 20)	-25.14 ± 0.37	σ	cal AD 1691 - cal AD 1729	259 -	221	cal BP	26.5	YU- 10915 pal- 12485
					cal AD 1811 - cal AD 1921	140 -	29	cal BP	68.9		
					2 σ	cal AD 1700 - cal AD 1720	251 -	238	cal BP	20.1	
					cal AD 1819 - cal AD 1833	132 -	118	cal BP	13.4		
材5 (Ob-2-III)	スキ	AAA (IM)	365 ± 20 (363 ± 20)	-23.74 ± 0.33	σ	cal AD 1880 - cal AD 1893	152 -	138	cal BP	9.4	YU- 10916 pal- 12486
					2 σ	cal AD 1812 - cal AD 1919	139 -	31	cal BP	69.5	
					cal AD 1677 - cal AD 1694	273 -	257	cal BP	11.8		
					cal AD 1727 - cal AD 1765	223 -	185	cal BP	28.3		
材6 (菅浦遺跡 2号土坑)	バラ科	AAA (IM)	1235 ± 20 (1236 ± 20)	-31.92 ± 0.28	σ	cal AD 1733 - cal AD 1777	178 -	174	cal BP	2.1	YU- 10917 pal- 12487
					2 σ	cal AD 1800 - cal AD 1813	151 -	138	cal BP	9.4	
					cal AD 1919 - cal AD 1940	32 -	10	cal BP	16.5		
					2 σ	cal AD 1667 - cal AD 1706	276 -	245	cal BP	15.7	
材7					cal AD 1720 - cal AD 1782	231 -	168	cal BP	34.4		
					cal AD 1796 - cal AD 1819	154 -	131	cal BP	11.2		
					cal AD 1832 - cal AD 1860	119 -	70	cal BP	16.0		
					cal AD 1915 - cal AD 1947	35 -	4	cal BP	18.1		
材8					cal AD 1468 - cal AD 1517	482 -	433	cal BP	45.4		
					cal AD 1505 - cal AD 1618	356 -	332	cal BP	22.8		
					2 σ	cal AD 1454 - cal AD 1524	497 -	426	cal BP	55.4	
					cal AD 1559 - cal AD 1564	392 -	386	cal BP	1.5		
材9					2 σ	cal AD 1570 - cal AD 1631	380 -	319	cal BP	38.5	
					cal AD 695 - cal AD 701	1256 -	1249	cal BP	3.2		
					cal AD 709 - cal AD 746	1241 -	1209	cal BP	40.3		
					2 σ	cal AD 764 - cal AD 778	1187 -	1173	cal BP	14.2	
材10					cal AD 793 - cal AD 802	1158 -	1149	cal BP	5.3		
					2 σ	cal AD 845 - cal AD 855	1106 -	1096	cal BP	5.1	
					cal AD 1611 - cal AD 1631	380 -	319	cal BP	47.8		
					cal AD 760 - cal AD 780	1190 -	1171	cal BP	15.1		
材11					2 σ	cal AD 788 - cal AD 875	1163 -	1076	cal BP	32.5	
					cal AD 800 - cal AD 855	1106 -	1096	cal BP	45.4		
					2 σ	cal AD 855 - cal AD 875	1106 -	1096	cal BP	45.4	
					cal AD 875 - cal AD 875	1106 -	1096	cal BP	45.4		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5668 年を使用。

2) 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 計算した誤差は、測定誤差σ (測定値の 68 % を含む範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5) 歴年の計算には、Oxcal v4.3.2 を使用。

6) 歴年の計算には、1 種目まで示した年代値を使用。

7) 調整データーsett は、Intcal13 を使用。

8) 調整曲線や校正プログラムが改良された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 種目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.2 %、2 σ が 95.4 % である。

3 結 果

(1) 樹種同定

結果を表6に示す。五斗遺跡の杭材5点は全てヤナギ属、加工材5点（材1～5）は全てスギである。菅田遺跡の土坑から検出された木材（材6）はバラ科であった。以下に検出された試料の解剖学的所見を述べる。

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

- ・バラ科 (Rosaceae)

散孔材で、管孔は単独および2～5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、放射組織は異性、2～3細胞幅、1～20細胞高。

(2) 放射性炭素年代測定

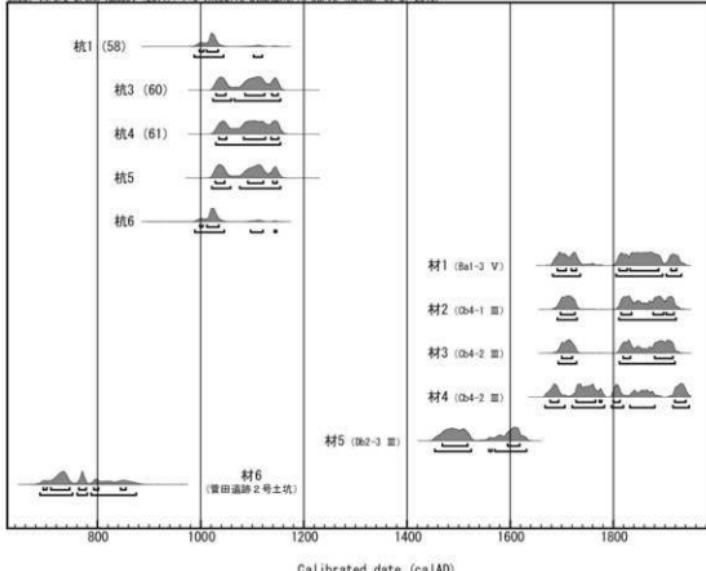
結果を表6、第28図に示す。全て定法での分析が可能で分析に十分な炭素が得られている。同位体補正を行った値は、杭1(58)が $1,005 \pm 20$ BP、杭3(60)が 950 ± 20 BP、杭4(61)が 940 ± 20 BP、杭5が 955 ± 20 BP、杭6が $1,000 \pm 20$ BP、材1が 115 ± 20 BP、材2が 95 ± 20 BP、材3が 90 ± 20 BP、材4が 145 ± 20 BP、材5が 365 ± 20 BP、材6が $1,235 \pm 20$ BPである。

曆年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（ ^{14}C の半減期 5,730 ± 40年）を較正することによって、曆年代に近づける手法である。ソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)を用いる。2σの値は、杭1(58)がcalAD987～1,119、杭3(60)がcalAD1,024～1,155、杭4(61)がcalAD1,029～1,154、杭5がcalAD1,021～1,155、杭6がcalAD988～1,147、材1がcalAD1,682～1,932、材2がcalAD1,691～1,921、材3がcalAD1,693～1,919、材4がcalAD1,667～1,947、材5がcalAD1,454～1,631、材6がcalAD688～875、である。

4 考 察

五斗遺跡の杭材5点は全てヤナギ属である。ヤナギは河川沿いなど明るい湿った場所に多く生育する。軽軟な樹種で本来土木材には向きである。伊東隆夫・山田昌久編(2012)の出土木製品用材データベースによると、杭は周辺に生育している雑木を用いる傾向があるため、ヤナギ属は遺跡周辺の河川近くで容易に得られた木材を用いたと考えられる。他の5点（材1～5）は全てスギである。スギは水に強く、割裂性が良くて曲げに強い良材であることから、建築材や器具材などさまざまな用途に使われる。伊東隆夫・山田昌久編(2012)の出土木製品用材データベースをみると、県内遺跡においてはスギ材の利用例は非常に多い。

菅田遺跡の2号土坑から検出された木材（材6）はバラ科であった。発掘所見から柱痕と考えられているが、柱材としては細いため、埋没の際に混入した木材と思われる。



第28図 历年較正結果

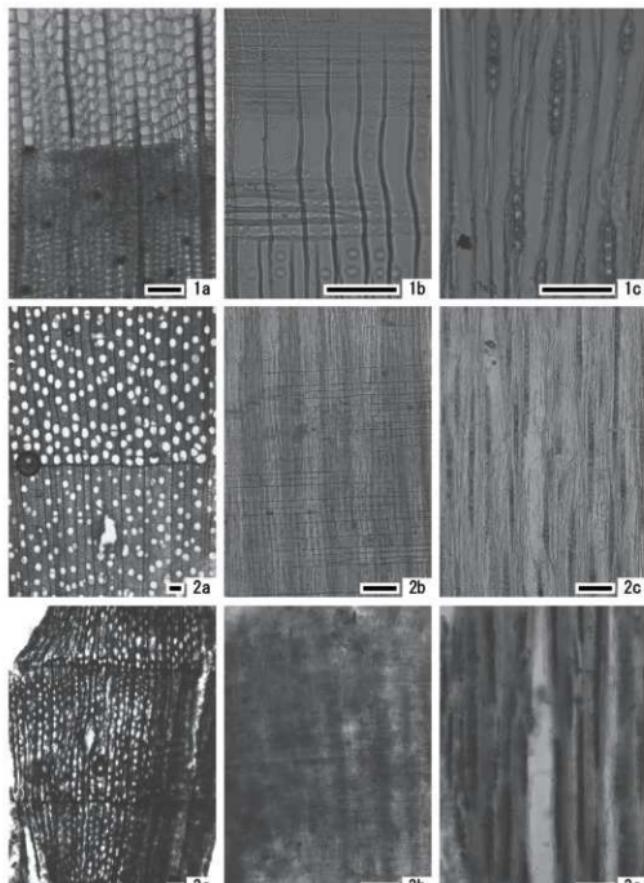
引用文献

- Bronk RC., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991. 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KE., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Sounthou JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 圖說木材組織, 地球社, 176p.

Stuiver M. & Polach AH, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.

Wheeler EA, Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. スギ(材2 Bal-3 V層)
2. ヤナギ属(杭4)
3. バラ科(材6 普田遺跡2号土坑)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

第29図 五斗遺跡・普田遺跡(1区)出土木材光学顕微鏡写真

第VI章 まとめ

1 五斗遺跡出土土器について

阿賀北地方における土器編年は、これまでの研究の蓄積により多くの案が提示されている（春日ほか 2004）。これらの編年案を総括したものが 2019 年に笹澤正史氏によって示されている（笹澤 2019）。以下ではこの笹澤編年に依拠して、出土土器の年代観などを提示する。

出土した遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・土製品、石製品、木製品である。大半を須恵器・土師器が占める。須恵器はそのほとんどが阿賀北地方の在地窯産であり、ほかは佐渡小泊窯産が数点みられる程度である。

遺構及びⅢ～V 層から出土した遺物のうち口縁部片全点に対し、口縁部計測法（宇野 1992）に基づき算出した器種構成比率を第 29 図 a～c に示した。また、調査区全体に土地変更が及んでいることから、遺構・遺物の遺存度は良くないものの、その中でも良好な資料を得られた 1 号性格不明遺構と遺物集中については、土師器無台椀・黒色土器無台椀の器高・底径指數の分布図を第 29 図 d～i に示し、別に特徴を提示した。

遺跡全体の器種構成比率は食膳具 93.6%、煮炊具 4.6%、貯蔵具 1.8% である。食膳具は須恵器が半数強を占め、これに土師器、黒色土器が続く（第 29 図 a）。

1 号性格不明遺構は須恵器食膳具が 6 割強を占め、土師器が 3 割強、黒色土器はごく少数である（第 29 図 b）。須恵器無台杯（40・41）の器形は、小形で薄く底部が丸みを持ち、丸山 A 4 期（笹澤 2014）に類似する。小形の須恵器有台杯（44・45）も同時期であろう。杯蓋（50）は道婦窯産が 1 点出土している。土師器無台椀は器高指數 30 以下の浅身と器高指數 33 以上の深身に二分化している。このことから笹澤編年 VI 2～VII 1 新期（春日編年 V 2～VI 1 期並行）に比定できる。

一方、遺物集中は須恵器食膳具と土師器食膳具の占める割合が逆転する。土師器無台椀・黒色土器無台椀が大部分を占め、須恵器無台杯・有台杯が補完する食膳具構成比率を示す（第 29 図 c）。須恵器無台杯は底径の大きい 63 が笹澤編年 V 1～VI 1 期（春日編年 IV 2～V 1 期並行）、64 の有台杯は笹澤編年 VI 2 期（春日編年 V 2 期並行）に比定できる。土師器無台椀と黒色土器無台椀は 1 号性格不明遺構と同様、浅身と深身に二分できそうである。このことから、やや古相を示す須恵器が混入するものの、主体をなす土師器無台椀・黒色土器無台椀の時期から笹澤編年 VII 1 期（春日編年 V 2～VI 1 期並行）にまとまると考えられる。

上記から、五斗遺跡における食膳具の器種構成は、須恵器杯類が主体の 1 号性格不明遺構と、土師器椀類が須恵器食膳具を凌駕する遺物集中に二分できる。ただし、1 号性格不明遺構の土師器椀類は、大半が遺物集中の椀類と類似しており、2 時期の遺物が混在していると考えられる。両者は、黒色土器が定量組成しており、笹澤編年 VII 期（春日編年 V 2～VI 1 期並行）を主体にしているとしてよいであろう。よって、遺跡の主体となる年代は、9 世紀第 2 四半期～第 3 四半期に比定でき、遺跡の存続時期は比較的短い。畝状小溝も検出されており、同時期の空毛遺跡・飯島遺跡などと同様、いわゆる「律令型村落」から「王朝国家型集落」への転換期（坂井 1989）の様相を示す遺跡のひとつといえよう。

2 菅田遺跡（1 区）について

菅田遺跡で検出した遺構は土坑 2 基、ピット 6 基にすぎない。遺物は湿地の水成堆積層からごくわずかに出土

している。県内の出土例が少ない赤彩土師器が出土していることは特筆でき、器形と法量から笠澤編年IV期(春日編年IV 1期並行)と考えられる。8世紀中葉頃に比定できよう。

試掘調査の130～135トレンチ(第II章参照)で遺構・遺物が確認されており、今回の調査区から東側に遺跡は広がっているとみられる。よって、今回の調査範囲は東に広がる集落の縁辺部の可能性がある。

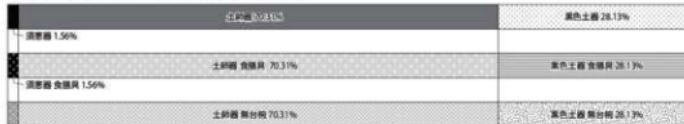
a 五斗遺跡 Ⅲ～V層出土土器 構成比率 (n=25.75)



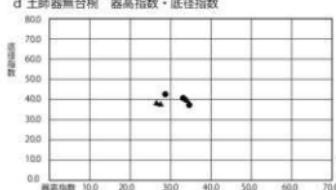
b 五斗遺跡 1号性格不明遺構出土土器 構成比率 (n=7.50)



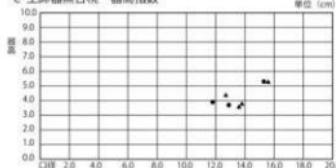
c 五斗遺跡 遺物集中出土土器 構成比率 (n=3.55)



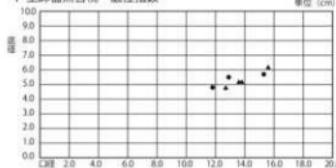
d 土師器無台紋 器高指数・底径指数



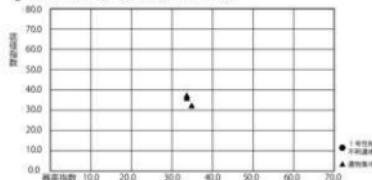
e 土師器無台紋 器高指數



f 土師器無台紋 底径指數



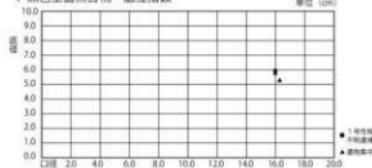
g 黒色土器無台紋 器高指數・底徑指數



h 黒色土器無台紋 器高指數



i 黒色土器無台紋 底徑指數



第30図 出土土器関連グラフ

引用・参考文献

- 家田順一郎ほか 1981『曾根遺跡Ⅰ』新潟県豊浦町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1982『曾根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会
- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四〇集 国立歴史民俗博物館
- 春日真実 1989「第5章 考察 3 窯詰めの方法」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室
- 春日真実 1999「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」新潟県考古学会編『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2019「第5章 第2節 第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 春日真実ほか 2004「越後阿賀北地域の古代土器様相」新潟古代土器研究会
- 加藤 学 1999「第V章 上層の調査 1. 道構」『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡(本文・観察表編)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上貞雄ほか 1991『發久遺跡発掘調査報告書』新潟県笹神村教育委員会
- 川上貞雄 1997『曾根遺跡Ⅲ』新潟県豊浦町教育委員会
- 桑原正史 1980「第一編 第二章 古代の新発田」『新発田市史』上巻 新発田市
- 国土地理院 1993『1:25,000 土地条件図 新発田』
- 坂井秀弥 1989「第7章 まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所
- 笹澤正史 2012「第V章 まとめ 2 遺物の時期的位置付けと特徴」『地蔵潟A遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 笹澤正史 2014「V まとめ 1 丸山A遺跡出土土器の特徴と時期的位置付け」『丸山A遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 笹澤正史 2019「第5章 第2節 第2項 阿賀北」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 菅善四郎 1956『川東郷土史料』川東郷土史料復刻刊行委員会
- 鈴木暁・笹澤正史 2012『空毛遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 高濱信行・ト部厚志 2004「第1章 立地・地表環境 1 青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡(関係諸科学・写真図版編)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 2011「第1章 遺跡の位置と環境」『七社遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 新潟古代土器研究会編 2004「越後阿賀北地域の古代土器様相」
- 平川南・小林昌二・相沢央 2002「第VII章 まとめ 2 遺物 C 第2号木簡について」『一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 本田祐二ほか 2015『飯島遺跡』新発田市教育委員会
- 本田祐二・笹澤正史ほか 2012『地蔵潟A遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 渡邊美穂子ほか 2001『坂ノ沢C遺跡Ⅱ』新発田市教育委員会
- 渡邊美穂子 2014「第1章 1 遺跡の位置と立地」『丸山A遺跡』新発田市教育委員会
- 渡邊美穂子ほか 2014『丸山A遺跡』新発田市教育委員会



調査区遠景 奥に加治城跡 (南から)



調査区遠景 奥に二王子岳 (北西から)



調査区遠景 奥に菅谷 (南西から)



調査区遠景 奥に五頭山地、笹神・五十公野丘陵 (北東から)

図版2 五斗遺跡 調査区全景、完掘状態、基本土層



調査区全景(北西から)



調査区全景(南東から)



Aa·Ab·Ba·Bb グリッド 完掘状態(上が南西)



Ba·Bb·Ca·Cb グリッド 完掘状態(上が南西)



Ba·Bb·Ca·Cb·Da·Db グリッド 完掘状態(上が南西)



Fa·Fb·Ga·Gb グリッド 完掘状態(上が南西)



基本土層③(北東から)



基本土層⑧(南東から)



1号土坑 土層堆積状態(東から)



1号土坑 遺物出土状態(東から)



1号土坑 完掘状態(東から)



2号土坑 土層堆積状態(南東から)



4号土坑 土層堆積状態(南から)



4号土坑 完掘状態(南から)

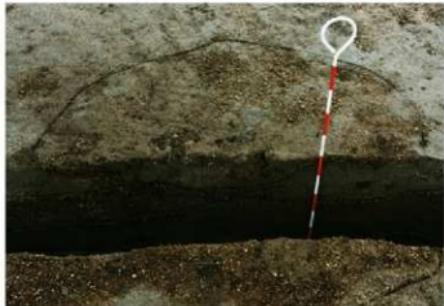


5号土坑 土層堆積状態(北から)



5号土坑 完掘状態(北から)

図版4 五斗遺跡 6～8号土坑



6号土坑 土層堆積状態(西から)



6号土坑 完掘状態(西から)



7号土坑 土層堆積状態(南西から)



7号土坑 完掘状態(南西から)



8号土坑 土層堆積状態(南から)



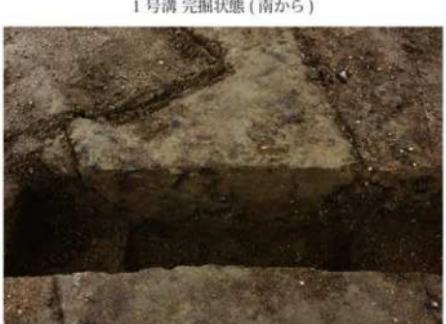
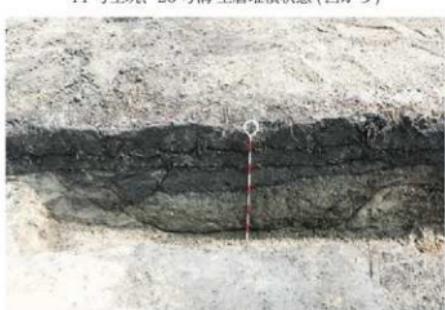
8号土坑 土層堆積状態(南西から)

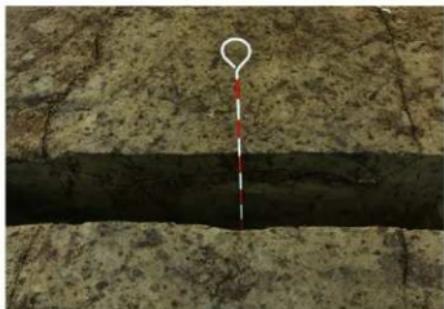


8号土坑 遺物出土状態(北から)



8号土坑 完掘状態(西から)





4号溝 土層堆積状態（北東から）



4号溝 土層堆積状態（南西から）



4号溝 遺物出土状態（南西から）



4号溝完掘、21号溝検出状態（北東から）



21号溝 上層堆積状態（南西から）



21号溝、P26 土層堆積状態（東から）



21号溝 完掘状態（東から）



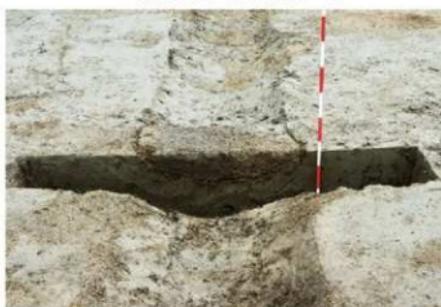
26号溝 土層堆積状態（北東から）



26号溝 遺物出土状態(北東から)



11号土坑、21・26号溝、1号性格不明遺構、P19・26完掘状態(上が南西)



22号溝 土層堆積状態(西から)



22号溝 完掘状態(西から)



23号溝 土層堆積状態(北西から)



23号溝 完掘状態(北西から)



斂状小溝 検出状態(南から)



5-7号溝 土層堆積状態(南から)

図版8 五斗遺跡 敵状小溝、1号性格不明遺構



8-11号溝 土層堆積状態(南から)



17-20号溝 土層堆積状態(南から)



敵状小溝 完掘状態(南から)



敵状小溝 完掘状態(上が北東)



1号性格不明遺構 土層堆積状態 A-A'(南東から)



1号性格不明遺構 土層堆積状態 B-B'(北東から)



1号性格不明遺構 遺物出土状態(南から)



1号性格不明遺構 遺物出土状態(東から)



1号性格不明遺構 遺物出土状態(東から)



1号性格不明遺構 完掘状態(西から)



遺物集中 出土状態(北東から)



遺物集中 出土状態(南西から)



遺物集中 土層堆積状態(北東から)



杭1~3 土層堆積状態(南から)



杭4 土層堆積状態(南から)



杭5・6 土層堆積状態(南から)

図版 10 菅田遺跡（1区）調査区全景、完掘状態、基本土層、湿地土層



調査区全景（北西から）



調査区全景（南東から）



Co・Cp・Do・Dp グリッド 完掘状態（北東から）



基本層序①（南東から）



基本土層②（北東から）



基本土層④（北西から）



湿地 土層堆積状態 (Fp3-2・4-2)（北東から）



湿地 土層堆積状態 (Fp1-2・2-2・3-2)（北東から）



湿地 土層堆積状態 (Ep5-2、Fp1-2)(北東から)



湿地 土層堆積状態 (Ep3-2・4-2・5-2)(北東から)



1号土坑 検出状態 (南東から)



1号土坑 土層堆積状態 (南東から)



1号土坑 完掘状態 (南東から)



2号土坑 検出状態 (南東から)



2号土坑 土層堆積状態 (南東から)



2号土坑 完掘状態 (南東から)

圖版 12 五斗遺跡 土器 (1)





19 (外面)



22



28



19 (底面)



23



29



20



24



30



21 (内面)



21 (外面)



32



25



26 (外面)



33



27



26 (底面)



34



35



41



46



36



42



47



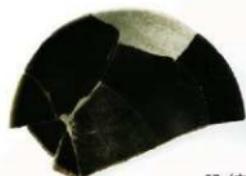
37 (外面)



43



48



37 (內面)



44



49



38 (內面)



38 (外面)



50



40



45 (外面)



45 (底面)



圖版 16 五斗遺跡土器 (5)



78 (内面)





82



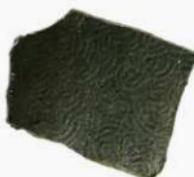
88



89



83



90 (内面)



90 (外面)



84



91 (内面)



91 (外面)



85 (内面)



85 (外面)



92 (内面)

92 (外面)



86



93 (内面)



93 (外面)



87



94



95

圖版 18 五斗遺跡土器 (7)、石製品、木製品



96



98



100



97



99 (内面)



99 (外面)



31



101



39



58



59



60



79



61



7



105



106



8 (内面)



8 (外側)



109



9 (内面)



9 (外側)



110



102



107 (内面)



107 (外側)



103



108 (内面)



108 (外側)



104 (内面)



104 (外側)

報 告 書 抄 錄

五斗遺跡・菅田遺跡 発掘調査報告書

経営体育城基盤整備事業 姫川右岸地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

発 行 令和3(2021)年2月8日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次 281 番地 2

印 刷 (株)天野印刷